



357  
51

5 6 7 8 9 9 18 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 9 18 6

始





夜のそ

作原フェニエゲルツ

色脚雄正山楠



版藏社潮新



脚本『その前夜』のはじめに

脚本『その前夜』は、言ふまでもなく、ロシアの三大小説家の一人、イ  
ワン・ツルゲエニエフ〔一八一八年—一八八三年〕の最も代表的な六  
大小説の一つを、新たに劇場の臺本として脚色したものである。  
原作の小説は一八五九年の出版。脚色者の使用したイギリス語  
譯本の題名は、“ON THE EVE”——

原作の小説に就いては、わが文壇に於いてすらこれまでに屢々、  
多くの先輩から優れた理解と同情のある論議を聞いた。ここに  
はただ、この作の女主人公エレエナが、謂はゆる一八五〇年代のロ  
シアに於ける活動的な新らしい革命婦人のタイプの先驅者であ  
るといふ點と、それから篇中、女主人公の父ニコライ・スタホフと、青

年彫刻家シユウピンのいみじき性格描寫が、平生ツルゲエニエフの藝術に對し、あまり多くの好意を持たなかつたトルストイをして、なほ且つ賞讃の言葉を吝しむことを得ざらしめたといふ點と、この二點をのみ注意して置くに止める。

脚本『その前夜』はわが藝術座四月興行用に宛つべく特に稿を起こしたものである。小説を劇化する困難は、原作が藝術的に優れた、濃やかな感味を有するものであればあるほど甚だしい。殊に専ら牧歌的な柔かい情的氣分に蔽はれてゐるツルゲエニエフのこの作のやうなものを、舞臺に上げせるといふことは、或は世界の何處の劇場も嘗て試みなかつた、恐ろしい「無謀」であるかも知れない。私はただ一個の甚だやくざな脚色者として、輕率に提供

せられたこの脚本が、松井須磨子氏等藝術座附男女優の技藝化を経て、果たしてどんな効果を持ち來たすであらうか、多分の好奇心を以て、靜かに待つてゐる外はない。

ここに出版するテキストと、藝術座が舞臺に使用するテキストとの間には、ただ第五幕の二場を一場に縮めた外に大差はない。

終りに、この脚本の第五幕のために、特に『ゴンドラの唄』を作して贈られた、吉井勇氏の厚意を謝する。

一千九百十五年四月中旬

脚 色 者

目次

第一幕.....〔七〕

第二幕——第一場.....〔四四〕

第二幕——第二場.....〔五五〕

第三幕.....〔一〇一〕

第四幕.....〔一四七〕

第五幕——第一場.....〔一六八〕

第五幕——第二場.....〔一七九〕

本脚

その前夜

五幕

夜のそ



人物

ニコライ アルテムキッチ スタホフ

「退職陸軍中尉。四十七歳。」

アンナ ワシリイエウナ スタホフ

「その妻。四十歳。」

エレエナ ニコライエウナ スタホフ

「その娘。二十歳。」

ウワル イワノキッチ老人

「ニコライの従兄。退職下士官。六十歳。」

パウエル ヤコオウレキッチ シユウビン

「アンナの甥。彫刻家。二十六歳。」

アンドレイ ペトロキッチ ヘルセネフ

〔シユウピンの友人。大學生。二十四歳。〕

チミトリ ニカノロキッチ インサロフ

〔ヘルセネフの友人。大學生。ブルガリア人。二十六歳。〕

エゴオル アンドレイキッチ クルナトウスキイ

〔元老院一等書記官。〕

レンチツチ

〔ダルマチアの船頭。〕

ゾオヤ ニキチイシユナ ミュルレル

〔スタホフ家の召使。ドイツ人の混血少女。十六歳。〕

カアチヤ

〔眼は開きて盲ひたる乞食少女。十三歳。〕

ドイツ人の労働者。

馭者。馬丁。下男。等

宿屋の亭主。女房。

場 處

モスクワ及びエネチア。

時

一八五三年夏より一八五四年の春まで。

〔クリミヤ戦争の前後〕

光 景

第一幕 モスクワ郊外 ツアリチナ湖畔

〔七月の午後。晴れた日の夕方。〕



第二幕

第一場 モスクワ郊外。スタホフ家の書齋。  
第二場 モスクワ河岸。往來の小禮拜堂。

〔共に第一幕より二ヶ月後。九月の午後。雷雨。〕

第三幕

第二幕第一場と同じスタホフ家の書齋。

〔第二幕より一ヶ月後。十月の午前。雨。〕

第四幕

モスクワ郊外。インサロフの下宿。

〔第三幕より一週間の後。十一月の夕方。雪。〕

第五幕

第一場 ゼネチアの町。大運河の岸。  
第二場 同。ホテルの一室。

〔第四幕より半年後。翌年四月の夜より曉方まで。〕

第一幕

モスクワ郊外 ツァリチナの湖畔

中央に暗い蔭を大きくひろげた菩提樹の古木。その下にいろ／＼の夏の花美しく亂れ咲く。大小の捨石二つ三つ。

遠景に碧なたゞへた湖水、白楊、白樺の森林、古城の壁。暑い七月の夕方。晴れた日。

だぶ／＼の職工服を着たドイツ人の労働者五六人。みんな酔っぱらひ。大きな聲で唄をうたつたり、怒鳴つたり、通りすぎて行く。

唄

お前も随分行ける口

おいらも随分行ける口

どうせ飲むなら底まで飲みやれ

酔つて倒れて死ぬまでも。

博奕をやれば底知らず

そのくせ拂つたことはない

どうせ打つなら底まで打ちやれ

裸體一つになるまでも。

インサロフとエレエナ。叢の間から話しながら出て来る。職工等すれちがひに、いろく

インサロフ。うるさい奴等だ。

エレエナ。ドイツ人の職工ですよ。このごろは澤山方々の工場に入り込んでゐるのです。

インサロフ。お母あさん達はどうかでせう、大分おくれましたね。

エレエナ。一々立ち止まつては景色を賞めてゐるんでせう。偶に遊びに出たものだから大變ですわ。あれで跡は十日ぐらゐる寢るのです。

インサロフ。ベルセネフにもはぐれましたね。

9  
エレエナ。ええ。あんまりわたくしがお話に夢中になつてしまつたものですか  
ら。——あなたはベルセネフさんと元から御親友でございましたの。

10 インサロフ。ええ。モスクワ大學の同窓です。——あの男は哲学科、わたしは歴

史料でしたか——

エレエナ。あの方大層お出来になつたのですつてね。

インサロフ。さうです。學校を三番で出ました。秀才です。

エレエナ。あの方の仰しやることは大變むづかしい學問上のお話ですけれど、うかがつてゐるうちに、何とも言へない好い心持ちに酔はされて、何處か明るい綺麗な外國の町でも歩いてゐるやうな氣になるのですよ。

インサロフ。恐ろしく立派な理想を持つた人物です。ロシア人の新らしい生活はああいふ人達の手で切り拓かれて行くのです。

エレエナ。わたくし、ベルセネフさんからしよつちゆう、あなたのお噂をうかがつて、おなつかしう存じてをりました。

夜の 前 前  
インサロフ。ベルセネフはよく友達を褒める男です。——

第 一 幕  
エレエナ。(職工等の冗談のために切られた話の緒を繼がうとして)で、それつきり其奴の

行方は分らないのでございますね。(と菩提樹の下に腰をおろす。)

インサロフ。(立つたまゝ)え、何でしたつけ。其奴とは。

エレエナ。先刻仰しやつたトルコの士官——あなたのおかあさんの仇だと仰しやつた——

インサロフ。投げつけるやうに。ああ彼奴ですか。知りません。また探しても見ないのです。

エレエナ。でも……わたくしあの、あんまり失禮なことをしつつかうかがふやうですけれど……ベルセネフさんのお話では、その士官のために大變おそろしいことがあなたのお家におこつたのですつて——

インサロフ。さうです。彼奴は僕の母を辱めました。父を殺しました。トルコの

豚が——

エレエナ。ほんとうにねえ。——(間)ま、あなたお掛けなさいませんか。

インサロフ。ええ。失禮します。(傍へかける。)

エレエナ。(やはり好奇心に釣られて。)でもそれはあなたのお幾歳の時でしたの。

インサロフ。十八年前です。八つの時でした。その時からキエフにゐる伯母の所に引取られてロシアへ来ました。ロシアは僕にとつては故郷でない故郷です。

エレエナ。それつきりお國へお歸りにはならなかつて。

インサロフ。いいえ、二十歳の年に一度ブルガリアへ歸りました。

エレエナ。それでやはりロシアへ戻つていらつしたのですね。

インサロフ。ええ。ふいと國が見たくなつて行つて見たのですが、そしてまる二年ブルガリアの國中遍歴して見たのですが——どこへ行つても癪にさはるこ  
とばかりです。外國人に支配せられてゐる本國は、ほんとうの外國よりも住心地が悪いのです。

第 一 エレエナ。その二年の間にどうして仇にお會ひなさらなかつたでせう。

一 インサロフ。エレエナさん、仇を討つ位のことは何でもないのですよ。しかし僕の今の頭には小さな一家のため復讐なぞといふことよりもつと大きな、國民のための復讐——いやさう言つては語弊がありますね、……つまり、ブルガリアの全國民が自由を得るか得ないかといふ問題の方がどれほど大事かしないのです。大事の前の小事です。その大事さへ仕とげられた曉にはこちらの小事も自から果されます……さうです、果されます。

エレエナ。(やさしく感動的に。)ああ、あなたはほんとうに心底からお國を愛していらつしやるのねえ。

インサロフ。いやそれは後にならなければ分りません。その國のために命を捨てた後でこそ、はじめてその男は國を愛してゐたと言へるでせう。

13 エレエナ。ではもしかあなたが、お國に歸る望みがどうかしてまるつきり斷れて

しまふやうなことのあつた場合には、一生ロシアに住まつてもいいと思ひですか。

インサロフ。さあ、——まあ恐らく辛抱ができないでせう——。大變さわいでゐ

ますね。(遠聲でしきりに大勢の唄ひさわぐ聲。)

エレエナ。今の連中でせう——(間。)あのお國の言葉は——ブルガリアの言葉はよつほど難かしいのでございますの。わたくしブルガリアへ行つて見たくなりましたわ。

インサロフ。何の難かしいことはありません。同じスラヴのロシア人であながらブルガリア語を知らないといふのは恥辱です。おやんなさい優しいです。二三冊ブルガリア語の本を貸しませう。ブルガリアの歌だつて決してセルギアなぞには劣りません。さう、譯してきかせませう。歌の趣意は……いやそれにしてはあなたはブルガリアの歴史を少しは御存じですか。

第 エレエナ。いいえ、一向に。

一 インサロフ。では歴史の大略だけでも分る本を……それはそれとして、ちやあまあ歌をきいて下さい……いややつぱり書いた物のはうがいい、とにかく讀んで下さい、そりやあきつと僕達の國の人間が好きになります。何でも壓制に苦しむ人間を愛するあなたですからね——(急に興奮して)あなた、知つてゐますか。ブルガリアといふ國が元來どれほど恵まれた國だといふことを知つてゐますか。それが今は見るかげもなく外國人の足下に踏み躪られ……さうです、吾々國民は土地も宗教も法律も、祖先から傳へてもつてゐた一切のものを奪ひとられてしまつた上に、彼等惡むべきトルコ人は吾々同胞を牛馬のやうに追ひ使ひ、屠り殺し、親子兄弟……ちりちりばらんゝに……

エレエナ。あなた——

15 インサロフ。ごめん下さい。僕は國のことといふとつひ夢中になつてしまうので

す。あなたは今、僕がどんなに國を愛してゐるか、と仰しやつたが、僕にとつては神に次いでこれほど確かな、信頼すべき實在はないのですもの——

エレエナ。ああ、あなたにはさうして信頼することのできる神様があるのだわ、お國があるのだわ、けれどわたくしには、わたくしには——

インサロフ。え、それはどういふ——

(叢の蔭にシユウビンとベルセネフの聲がする。)

エレエナ。しい、みんな来るやうですよ。あなた、もうあちらへ参りませう。

インサロフ。でもベルセネフのやうですよ。わたし達をさがしてゐるのでせう。

エレエナ。いいわ、いいわ、ベルセネフさんはいいいけれど、またシユウビンの先生がからかつてうるさいから。ね、もうあちらを散歩して、わたくしはまだ澤山うかがひたいお話があるのですもの——

夜のそ

インサロフ。(立上がり乍ら、腕を出す。)

第 エレエナ。(につこりして男の腕に凭り乍ら。) あなた、ほんとうにこの國には長くいらつ

一 しやらないおつもりですか。

幕 (二人は相携へて左手へ下りて行かうとする。シユウビン見つけてうしろから聲をかける。)

シユウビン。おい。エレエナ。何處へ行くんだい。——僕は何處へ雲がくれた

かと思つてさがしてゐたんだせ。

エレエナ。(肩を聳して。) 何處へも行きはしないわ。(四人の間に氣味合ひ。)

インサロフ。(つれた氣味で。) ベルセネフ、おそかつたね。君達はどうしたらうと言つてゐたところだ。——なあに少しエレエナさんに、ブルガリアの話をしてゐたところさ。

エレエナ。(ベルセネフの方へ寄り肩に手をかけ、なつかしき調子で。) ベルセネフさん、どうなすつて。お顔色がわるいやうよ。

17 ベルセネフ。(強ひて笑つて。) さつきの舟暈がまだ残つてゐるのでせう。

エレエナ。いけませんわ。——ねえ。ベルセネフさん、わたし、インサロフさん

にいろいろお國のお話をうかがつたのですよ。

ベルセネフ。おもしろいでせう。インサロフの話は。

エレエナ。ええ、びつくりするやうなことばかり。

シユウビン。諸君、ブルガリアの話がこの場合、どれほど切迫した大問題だか知らないけれど、そんなところに窮屈に固まつて立ち話をしてゐなくてはなら

ないわけはないだらう。少し休まう。

ベルセネフ。ああ。(と言つてエレエナと並んで真中の菩提樹の下に腰をかける。インサロフもつゞく。三人エレエナを中心にして座る。) あとの連中はどうしたらう。

シユウビン。毫碌ぢいさんとヒステリーのをばさんの道行ぢやあ、ちよつくりぢやあない。(短いくたびれた沈黙。)

夜前のベルセネフ。(沈黙を破らうとして重い口を開く。) エレエナさん、先だつての原稿を讀ん

第 一 幕 下さいましたか。

エレエナ。ええ、まだみんなは。——わたくし何だか少し難かしくつて。

シユウビン。何だい、原稿つて。

ベルセネフ。亡くなつた親父の遺稿さ。

シユウビン。うん、例のカント哲學の神髓とその社會的倫理的何とか的何とか、おそろしく長つたらしい名前の本かい。——あれをエレエナに讀ませるのかい。

ベルセネフ。うむ。でも親父の一生涯の仕事だつたし——僕の仕事もやはりそれを引きつづいて完成する外にはないのだから。いはば僕の大事の心血なのだから。是非エレエナさんに見て貰はうと思つてね。——だが、おもしろくないものでお氣の毒でしたね。

エレエナ。(氣の毒さうに) いいえ、いいえ。そんなことはないんですよ。ただお恥かしい話ですけどわたくし、哲學の方の本を讀みつけられないものですから。

では——お父さんは一生カントを御研究なすつていらしたのですね。  
 ヘルセネフ。さうです。一切の人間の思想はカントに歸入するといふ父の考で。  
 シュウビン。おい、おい、勘忍してくれないか。この炎天に哲學の野外講演をは  
 じめるつもりかい。ブルガリアの革命を論じたり、カント哲學の神髓を講じ  
 たり、冗談ぢやあない、今日は遊びに来てゐるんだせ。

エレエナ。ぢやあ何の話をすればいいといふの。

シュウビン。もう少し色氣のある話をね。ごらんさい、あの通り太陽はかがや  
 いてゐる。空も青い、水も青い。眞夏の花は野にも山にも咲きみだれてゐる。  
 そこでわがエレエナさんを擁して吾々は大地の美と人間の美を談じよう  
 と思ふ。

エレエナ。話したきや一人でしやべつてゐるといいわ。私達はそんな話よりかよ  
 つぼど——

第 一 幕  
 シュウビン。ブルガリアの革命かカントの哲學がいいといふんですか。嘘を言ひ  
 給へ。分りもしないくせに。

エレエナ。ええ分りません。分らないから、お話をききたいといふのぢやありま  
 せんか。そんなあなたのいふやうな、小説や芝居や流行の着物の話なんか  
 ら、母あさんだつてゾオヤだつて知つてゐることなのぢわ。

シュウビン。だから僕にはあのゾオヤがちやうど相應してゐるといふんだね。腹  
 のなかが空つぽでおつちよこちよいのところが、あのうすのろのドイツ娘に  
 相應してゐるといふのだね。

エレエナ。誰れもそんなことを言やしないぢやありませんか。でも自分でさう極  
 めてゐるんならそれでもいいわ。

シュウビン。ほんとうにエレエナ、僕をそんな風に思つてゐるんですか、ああ。

(情が迫つて涙ぐむ。)



エレエナ。ええ、あたしあなたみたいなの、人の折角熱心に話してゐることに水をさしたりする人、大きらひです。

ベルセネフ。まあエレエナさん、あれが藝術家のわが儘です。勘忍なさい。

エレエナ。いいえ、いくら藝術家でも自分だけわが儘を言つて、他人の自由を妨げる権利はありません。それにどうしてシユウビンが藝術家でせう。あの人は生まれてまだ一つだつて満足な藝術の製作を仕上げたことはないではありませんか。

シユウビン。(激しげに) エレエナ、あなたは嘗ては僕の藝術のために僕を愛してくれたこともあつたのです。僕の藝術も、いつの間にかちりあくたのやうに侮蔑されることになつたのですね。捨てられることになつたのですね。——ベルセネフ、氣をつけ給へ、君の哲學も今にエレエナさんのために二束三文に踏み倒されてしまふのだ。

第 エレエナ。何んですつて——

一 シユウビン。まあいいさ。カントの哲學よりブルガリアの革命の方が有りがたくなるだらうといふだけの話さ。——(エレエナの何が言はうとするのを抑へてわざと大きな聲で。) さうだ、可哀相な戀愛の失敗者、やくざな彫刻家のシユウビンは、尊

敬すべきカントの哲學だかブルガリアの革命だかのために、あのやくざな森の自然と聲を合はしてお祝ひの歌をうたはう。「み神よ來ませもろともに、われ等がためのあえかなる、マリイの君の幸ながく……ほい、ちがつたエレエナの君の幸ながく——」

(人聲。召使の少女ゾオヤ。跡からアンナ、ウワル老人出てくる。)

ゾオヤ。まあ馬鹿々々しい大きな聲をして、誰だと思つたら——

シユウビン。シユウビンの頓狂屋さんか。おきまりをいつてやがる。——ああ、僕はもうロシアの國もロシアの人間も厭になつた。早く外國へ行きたい。イ

タリアへ行きたい。

ゾオヤ。なあせ。

シユウビン。(わざと氣取つて。)そこには太陽がある。美人がある。(ゾオヤを見て。)おつと失敬。お手近にもこんな美人のゐることを忘れてゐた。(接吻しようとする。)

ゾオヤ。(すりぬけて。)馬鹿! 貴婦人に向つて失禮な爲をするものではなくつてよ。

シユウビン。ほう、貴婦人、マダム、えらいな。イイレエ、ハンド、マダム。

(とゾオヤの手をつかまへて無理に接吻する。)

ゾオヤ。(わざと頓狂に。)あら! (といふなり脊伸びをしてシユウビンの麥藁帽を叩き落す。シユウビンがおつかけてとらうとすると、逸早く拾つて遠くへはふり出す。光景はそんなことでしばらく賑ふ。)

アンナ。(先刻からウウル老人と並んで菩提樹の陰に腰を下してゐたが、物おつくうらしく、そのくせ上機嫌に。)ほ、子供だよ。何てんだらうねえ。若いうちが花ですよねえ。

夜のそ

ウウル老人。(返事はしないで、口をもぐぐ、この人のくせの指を強褻的に動かして見せる。)

第

(この時ゾオヤ、突然キヤツといふ悲鳴をあげる。みんなびつくりする。シユウビン、ゾオヤの小

一

さな身體を抱き緊めてキユウ〜いはせてゐる。)

幕

ベルセネフ。あの娘も可なりいたづらですね。

アンナ。でもシユウビンだつてあなた、随分馬鹿々々しい。

(この中駈者馬丁等は菩提樹の下にテーブル掛をひろげて食物と酒をならべる。)

アンナ。さあ、さあ。ふざけてばかりゐないで——お坐んなさいよ。

(皆々菩提樹の下に車座になる。)

アンナ。さあ皆さんたんとあがつて下さいよ。(ウウル老人に杯をすすめて。)さあをぢ

さん、あげませう。今日は御苦勞様でした。——ほんとうにお天氣がよくつ

て何より仕合せでしたねえ。(しきりに接待につとめる。)

ベルセネフ。まつたぐいい日でしたね。(アンナの杯をうけて。)いやどうも恐れ入りま

す。奥さん、今日は大變いい血色です。二十年も若くなつたやうです。

26 アンナ。さうでせうつて。ほんとうに若いんですもの。

(皆々笑ふ。)

シユウビン。(ゾオヤをわきにひきつけて、だらしない恰好をし乍ら。)をばさん、頭痛は直りましたか。

アンナ。大變いい工合だよ。

シユウビン。だから、僕の言ふとほりでせう。

アンナ。ええ。でも今日出がけに父うさんに皮肉を言はれたので、すつかり厭になつてしまつたけれど、出て見ればやつぱり氣が變つていい心持ちだねえ。

——さあ皆さん、たんと上がつて下さい。かういふ野天の下でたべるものはいくら喰べても底がしれません。

(みんな飲食する。そここで會話。)

夜の 前 の そ  
シユウビン。(ゾオヤの膝を探して。)ああねむくなつた。おいゾオヤ、枕になれ。極樂

第 一 幕  
の 夢 を 見 る ん だ 。

一 ゾオヤ。いやよ、いやよ。(わざとらしく逃げまはる。シユウビン追つかけて草原をころげまはる。)

シユウビン。(そこらをとび廻り乍らふとインサロフの領元をのぞき込んで、頓狂に。)やあ、インサ

ロフ、君の頸には大きな創がありますね。

インサロフ。(顔を赤くして短く。)ええ。

シユウビン。(追窮するやうに。)戦争に出たんですか。喧嘩したんですか。

インサロフ。いや、なに、つまらん創です。

エレエナ。失禮ではありませんか。そんなことを——

シユウビン。へえへえ、すみません。さうだ、革命黨の英雄を尊敬しなくてははいけない。(眩く。)

27 (この時湖水の上に太陽が落ちかけて赤々と鮮やかな夕照を四邊にひろげる。一同喝采する。)

アンナ。(うつとりいゝ心持ちに、こくりこくりやつてゐたが、この聲におどろいて眼を醒ます。)お

や、綺麗だ。

シユウビン。おや、綺麗だ、もないもんだ。寝てゐたくせに。これから家へ歸る  
んですせ。をばさん。

アンナ。あい、あい、大丈夫ですよ。(耳をすませて) ああ湖水で誰か歌を唄つてゐる。いい聲だこと。ゾオヤ、お前さん、さうやつて喧嘩ばかりしてゐないで、けふのお別れにまた歌でもおうたひな。ああ馬鹿にいい心持ちにくたびれてしまつた。(うつとりしてゐる。)

シユウビン。(頓狂な聲で) よし、僕がうたはう。歌でもうたはなくちやあやりきれない。(無理にゾオヤを引つ立て、自分の傍にたせせる) さあ一所にうたふんだ。

ゾオヤ。『ロオレライ』がいいわ。

シユウビン。よし来た。

(一同拍手する。)

シユウビン(聲を合はせて歌ふ。)

ゾオヤ

『われは知らねどわがこころ  
などかなしくはなりぬらむ  
すぎし昔の物語  
わするるときのあらざれば、

『夕涼しくくれそめて  
水しづかなるライン川  
入日まばゆく山々の  
頂かけててりはえつ。』

「あやしやかしこの岸の上に  
世にうつくしき少女子が  
かざしの玉のきららかに  
黄金の髪を梳る……………」

(ふと突然、叢の間から「ブラッオ、ブラッオ」「うまい、うまい」「やれ、やれ」といふ叫び聲が交雑してきこえる。)

やがてがさがさと無作法に、先刻のドイツ人の労働者、各自、チヨッキ一枚、シヤツ一枚の亂れた風情で眞紅な顔をしてぞろぞろ出て来る。

ゾオヤ、労働者の群を見て、(また厭な奴等が来た)といふ顔をして歌を止めてしまふ。)

労働者甲。ほ。みなさん、毎度失禮。はははは。

労働者乙。ほ。もうおしまひかね、お嬢さん。もつとやれ。もつとやれ。ねえ。

その前の夜

遠慮はいらねえ。

第一 労働者一同。さうだ、もつとやれい、もつとやれい。ははははは。

一 労働者甲。(アンナの傍へ寄つて来て。)ボン、ジュウル、マダム。奥さん、今日は、ごきげんよろしう。はははは。時に、奥さん。何故もつと歌はせてくれねえんです。

(アンナ尻込みして逃げかける。)

労働者一同。さうだ、さうだ、何故だい、何故だい。

シユウビン。(逃げてくるアンナをうしろに庇つて、こらへかれてつと出ようとするインサロフを抑へて前へ進み出る。氣取つた聲で。)尊敬すべき外國の紳士——かやうに申しては失禮ではありますが、君は吾々一行を非常なる驚愕に導きました。僕の判断にして誤らないならば、君はコオカシアン種族中のサクソン民族に屬せられるものと考え考へる。従つて社交の禮儀の何者たるかを熟知せられるに相違ないと信ずるのであります。然るに、その尊敬すべき君が未だ一片の紹介もない貴婦人に對してぶしつけにも言語を交へんとせられるのは甚だ當を得ない次第ではな

いか。實をいふと、僕一人としては、他日君と共に一夕の歡をつくす機会あらむことを希望してゐる。何となれば、君の肉體の筋肉が、二頭筋といひ、三頭筋といひ、全く理想的の發達をとげてゐて、苟くも一個の彫刻家たる名譽として、君をモデルとして傑れたる製作を出すことを得ば、平生の望足る次第であるからであります。しかし乍ら君、不幸にして今日はその場合ではないのであるから、まあ引込んでくれ給へ。

勞働者甲。(首を曲げたり臂を張らしたりいらし乍ら聞いてゐたが相手の言葉がきれると大きな聲で。) な、何をべらべら喋べるんだい。何が何だかちんぷんかんぷんちつとも分かりやあしねえやい。やい、鼻つたらし、手前おらをいかけやか靴直しぐらゐに思つてゐると大ちがひだぞ。へッ、憚り乍らかう見えてもお役所にお勤めなさる官員様だぞ。

シユウビン。誰もさうぢやないと言やしないがね——

第一 勞働者甲。だ、だ、だまれい。口ばかり六づかしいことをたたきやがつて、手前達、何にもろくな仕事もできねえで遊んでゐやがる。お職工様を馬鹿にする  
と神様の罰が當るぞ。邪魔だ、糞ッ、ときやあがれ。(手荒くシユウビンをつきとばす。シユウビンよろけてウソル老人にぶつかる。老人滑稽な腰附でうけとめる。勞働者等笑ふ。)

ベルセネフはアンナとゾオヤとを、インサロフはエレエナをかこつて立つ。さあ、そこで、おらの言草はな、おら達がさつきもつとやれと聲をかけたのに、何故もつとやらねえ——とまあかう言つてこのマダムに談判するつもりなんだが、まあいいや、もう面倒くせえ、それよりか一層手つとり早くそれそこにある年増の——ぢやねえ、あんなおばあさんに用はねえ。そこにあるもう一人の若えのか、(ゾオヤを指す。)あすこにある若えの(エレエナを指す。)どつちでもいいや、おいらの國のドイツ語でクス、それ接吻といふ奴を(肩をつき出して指をあて乍ら。)是非やつてお貰ひ申してえ。ええ、おい、何とお安い御用だらうぢやあねえか。

はははは。

労働者乙。やあ、野郎、クスだつて言やがら。甘くやつてやがるせ。お安い御用だ。やれ、やれ。はははは。

労働者一同。やれ、やれ。はははは。

労働者甲。(手をひろげて)さあ来た。(とゾオヤを追つかける。ゾオヤ叫聲をあげて逃げる。今度は

エレエナの傍に寄つて来る。エレエナ殿い蒼白な顔をして憤怒に身體を震はせてきつとなる。インサ

ロフ、エレエナをうしろにかこつてつかつかと労働者の前に立つ。)

インサロフ。どうか退いてくれ給へ。

労働者甲。ふつ、ふつ。何だ、何だ。退いてくれた、またけたものが出やがった。

へッ、大きにお世話だ。おらの足でおらが好きな往來を歩くのに、手前なんかにぐづぐづぬかされるわけはねえんだ。何をいやがるんでえ。

インサロフ。(蒼白い顔をして沈痛な調子で)何もくそもない。君が婦人の迷惑になるや

一 うなことをするからだ。君が酔つてゐるからだ。

労働者甲。へッ、何だ、おらが酔つてゐる。大きにお世話だ。おい、きいたか。

え。へエレン、ジイ、ダス、ヘル、プロフェツソル。おききなすつたか、隊長さんだ。忝けなくも官員様に向つて、何、何をいやあがる……さあ、てつとり早くやつてもらはうせ、そのクスといふ奴を——

インサロフ。貴様、もう一ト足動いて見ろ。

労働者甲。さうすりやあ何だ。

インサロフ。湖水にぶち込むばかりだ。

労働者甲。へッ、湖水にぶちこむ。へッ、隊長きいたか。何だ、たつたそれつきりのことか。うんにやおもしろえ。やつてもらうべえ。(と拳固をふりあげて二足三足寄つてくる。)

インサロフ。(つと立寄りさま労働者甲の腰を抑へて引すつて行き、直ぐ叢の下に突き落してしまふ。)

ンといふ水音。婦人達の叫び。労働者等の騒擾。下から「おおい、おおい」といふ哀號。一同湖水をのぞき込む。労働者等は「マイン、ゴット」を絶叫し乍ら巖の下へ下りて行く。一しきり大擾亂。

アンナ。(殆んど泣きこもで。) あれ、沈む、沈む。ねえ、助けておやんなさいよう。  
 インサロフ。(冷やかに。) 自分で泳いで上がります。さあ、もううつちやつて歸りませう。(アンナを無理に連れて来る。)

外の人達も湖水を見捨て、菩提樹のまはりに集まつて来る。みんながうつかりしたやうな顔をしてゐる。下ではまだがやがやさわぐ人聲がしてゐる。しばらくしてそれも静かになる。——  
 ふと、物におそはれたやうにウワル老人がけたたましく高笑ひをする。シユウピンがつづいて笑ふ。アンナもゾオヤも、それからエネエも笑ふ。しまみには悪鬼のやうな顔をしてつつ立つてゐたインサロフまで笑ひ出す。)

ウワル。(笑ひかけて肩ではあすう息を切り乍ら。) はははは、わ、わしは下でドブンと水音がしたから、何だらうと思つてゐると、ほらね奴さん、可哀さうに、ぶくぶ

くのおぶおぶだ。はははは、はははは。

ゾオヤ。ふふ、あたし思ひ出すとをかしいわ。だつてあの大きな男の足が二尺も上にあがつたのですもの。まつくろけな足がによきつと出て——。

ウワル。さうだよ、さうだよ。やあ脛だ、脛だ、と思つてゐるうちに、ぼちやんのぶくぶくさ。

ゾオヤ。でもインサロフさんはどうしてあんなことができたんでせう。向ふは三層倍も大きさがあるんぢやありませんか。

ウワル。手づまだよ。わしはほんとに見てゐた。片手がちよいと腰にかかると、あいつの身體が風船玉のやうに飛んだ。(皆々笑ふ。)

(太陽がすっかり落ちてそこらが暗くなる。どこにか月の光がほんのり射しかつた心持。いろくの包や囊をかへた駈者馬丁二三人の姿が後景に現はれる。)

アンナ。月が出ましたね。知らない間に夜になつた。さあそろそろ歸りませうか



ねえ。すつかり遊んでしまつた。

(湖水の水の面が月影をうつしてきらきらかややいてくる。)

シユウビン。(勿體らしく立上り。諸君。では不束ながら閉會の辭を申し上げます。一同拍手する。諸君。汝若し戀愛をなさば心の盃のあらん限を傾けてためらふことなかれ。汝若し宴樂をなさば曉の雲の破るるまで楽しんで醒むることなかれと昔の詩人は申しました。曉の雲どころか實はまだやつと夜になつたばかりであります。肝腎の主人公のをばさんがもう大分眠さうでありますから、名残はつきませんが今日の宴會はこれを以て終りいたします。終りにのぞんで今日一日わが一人のをばさんの面倒くさい介添役を勤められた、親愛なるウワルをぢさんの健康を祝します。(いきなり取者の手にもつた三鞭酒の瓶をとりあげ、コップを二つもつて来て老人と共に飲む。)

夜の  
前  
そ

アンナ。(口をもぐぐやつてゐる老人に。何ですねえ。髯でもお拭きなさいな。さあ行

第

一

さませう。わたしもう何だかたびれて死にさうだ。(例の妙な指先の毒をやつてゐるウワル老人の手をつかまへて、その腕にかかり乍ら下りて行く。)

幕

(ソオヤ、無理にインサロフの腕に凭つて下りて行く。)

シユウビン。(インサロフの跡からつづき乍らふりかへつて、ベルセネフに。)ブルガリアの英雄、

革命の志士、えらいもんだね。どうだい、今日の大芝居は。

ベルセネフ。(陰鬱な調子で。)あれだけのことさへ君にはし得なかつた。(考へ込んで立つてゐる。)

シユウビン。ふん。エレエナをとられないようにしたまへ。ブルガリアの畜生、

うまくやつてやがら——

(シユウビン下りて行く。エレエナつづいて行きかけたが振り返つてベルセネフの傍へ戻つてくる。)

エレエナ。(やさしくベルセネフの手をとつて。)ベルセネフさん、失禮いたしましたわ。

今日はあなたとろくろくお話しするひまがありませんでしたのね。いつもシエーピンと御一所だつたのですもの。でもあたしインサロフさんからいろいろお國の話をうかがひましたわ。あの方ほんとうにお國のことばかり思つていらつしやるやうですわ。國を救ふ、國民の自由を回復する、何といふ大きな思想でせう。何といふ大きな言葉でせう。

ベルセネフ。さうです。インサロフはえらい男です。あの男の歩む道には目標がありません。あの男は決して退屈しません。

エレエナ。わたし、ブルガリアといふ國へ行つて見たいと思ひますわ。國民がみんな自由に焦がれ復讐に燃えてゐるやうな、そんな國へ行つて、その人達と一所に革命の旗を振つて働いて見たいと思ひますわ。

夜のそ

ベルセネフ。(沈痛な調子で。) エレエナさん、見ていらつしやい。この退屈な單調な果てしのない平原と、白い寂しい夜の國にも、そのうちに自由とか革命とか叫

第一幕  
んで駆けまはる人達が出て來ますよ。私達は随分長い間退屈を辛抱して來たのですからね。

幕

エレエナ。でもその時にはあなたもやつぱり革命の旗を振るでせうか。

ベルセネフ。さあ恐らく僕はその時は、外國の大學へでも行つて本を讀んでゐるでせうね。——(耳を立てて。) おお、みんな呼んでゐますよ。さあいらつしやい。

エレエナ。ええ。あなた腕を貸して下さいな。

ベルセネフ。ええ。——いいえ、僕はお跡から。(かくくエレエナの手を振りはずす。エレエナしづかに出て行く。)

ベルセネフ。(女のうしろ影を見送つてゐるが、妻が見えなくなると、太息をついて冥想的に空を見上げる。二三歩行きかける。下から女の鋭い聲で「ベルセネフ、ベルセネフ」と呼び立てるのが重苦しい寂寥を破る。)

幕

ロオレライ  
(LORELEY)

Musical notation for the first system of 'Loreley'. It consists of a single staff with a treble clef and a piano (p) dynamic marking. The notation includes various notes, rests, and fingerings (e.g., 1, 2, 3, 4, 5).

ワレーハシーラホワガココローナドーナシー

Musical notation for the second system of 'Loreley'. It continues the melody from the first system, featuring various notes, rests, and fingerings (e.g., 1, 2, 3, 4, 5).

クハナリーヌーラソ—スキュームカシノー

モノガタリ ウスールトキーノアラサーバ

Musical notation for the first system of 'Monogatari'. It consists of a single staff with a treble clef. The notation includes various notes, rests, and fingerings (e.g., 1, 2, 3, 4, 5).

## 第二幕

## 第一場

モスクワ。スタホフの家。

古風なロシア風の装飾をした書齋。

右手、観客席寄りに玄関に通ふ小さな扉口。右手奥斜めの位置に食堂。内部の装飾見えること。左手に大なる板扉。客間へ通じてゐる。舞臺正面は大なる玻璃扉。その彼方にエランダ。その階段を降りて、樹立の深いひろびろとした花園に降りるやうになつてゐる。

正面の左右に窓。

室には圓卓。カルタ卓。寫字卓。椅子。ソファア。土耳其椅子。ピアノ。書棚。彫像。油畫像。姿見など。

一體に古風な軍人らしい好みと、バリイスタイルの模倣らしい好みと——  
蒸し暑く晴れた日の午頃。

エレエナ。(快活な表情、讀み差しの本を置いてほつと息を吐く。) ああ、勞れた。ブルガリアの言葉は元はロシア語と同じだといふけれど、随分むづかしいわ。易しい、易しいつて、あの方も嘘つきだわ。(懐中時計を出して見てにっこりし乍ら。) おやもう一時半。あの方のいらつしやる時分だわ。しようがないねえ。まだちつとも覺えやしない。先生に叱られるわ。構やしないわねえ。先生。インサロフ先生。(机の抽斗から、寫眞を取り出して接吻する。) 澄ました顔をしていらつしやるわ。憎らしい。(寫眞を、抽斗に投げ込む。)——でも不思議だわねえ。つひ此の間まで、一人ぼつちで、油畫のマドンナとお話ばかりしてゐたあたしが。(油畫像の前へ来て。) ああ、マドンナ様相變らず一人ぼつちで、寂しさうな顔をしていらつしや

るわねえ。けれど私はもうひとりではなくなつたのですよ。デミトリ・インサロフ——さうです。デミトリ・インサロフといふ立派なお友達が出来たんです。ほんとうに一人ぼつちで、友達もなく兄弟もなく、どうして私は生きてゐられたらう。ベルセネフだつて、シユウビンだつて、悪い人達ではないけれど、やはりあの方とは違ふんだもの。あ、足音がする。いらしたか知ら。ああ、どうしよう、かうしてちつとしてお祈りをしてゐると、あの方がいらつしやるわ。(マドンナの像の前へ跪いて黙禱する。)

(ウワル老人長いパイプをふかし乍ら、玄關の扉をあけて出て来る。エレエナのうしろ姿を見てげんな顔をして滑稽な身振をし乍ら後じさりに戻らうとする。)

夜の前の  
ウワル老人。をぢさんだよ。  
エレエナ。いらしつて、いらしつて、あたしこちらですわ。(振りむいて老人を見付けらる。)  
あら、をぢさんなの。

第 二 幕  
エレエナ。もう厭だ。口惜しい。(いきなり老人にしがみついて。よろ／＼するのを押しつぶすやうに、トルコ椅子の上に坐らせる。)

ウワル。これ亂暴をしちやいけない。

エレエナ。いいのよ、いいのよ、をぢさんなんかくちやくちやにしたつてかまはないわ。いいでせう、こゝをちよいと接吻して。随分いい工合に禿げてるわ。(禿頭に接吻する。)

ウワル。(両手を變な恰好に振りながら。)  
氣味がわるい。

エレエナ。(段々ばしやいだ調子になり。)  
ねえ。をぢさん、昔からこんなに禿げていらしたの。

ウワル。馬鹿をいひなさい。私が陸軍少尉でな、ナポレオンの戦争に出た時には

エレエナ。男振りはよし、舞踏は達者だしでせう。度々伺つてよ。けれど頭は禿

げてゐたかも知れないわ。

ウウル。馬鹿をいふな、禿げた頭で戀が出来るか。

エレエナ。あら、をぢさんも戀をした事があつて。

ウウル。なくつてさ。だから、戀をする女の眼といふものを私は知つてゐる。

エレエナ。戀する女の眼からは薔薇の花が咲くつていふわ。

ウウル。だからお前の眼に薔薇が咲いてゐる。

エレエナ。あら、嘘。あたし戀なんぞしてはゐません。——ただね、あたし大變

うれしいの。何もかもうれしくつてしようがないの。氣が狂つたのか知ら。

ウウル。どうもさうだらう。

エレエナ。何とでもおつしやい。ラララ、ラララ。(足拍子をとつてゐる。)

(シユウビン客間の扉をあけてのそく。)

夜のそ

エレエナ。(シユウビンを見付けて) ああバヴエル。あたしあなたにお話があるのよ。

第

シユウビン。人がちがふでせう。(肩を聳かして引込む。)

二

エレエナ。あの人はおこつてゐるのね。(しよげた様子をする。)

幕

(柱時計二時を打つ。)

エレエナ。(急に緊張した様子になる。) おや二時だ。あの方はどうしたのだらうねえ。

いらつしやらないのか知ら。そんな筈はない。あんなにお約束をしていらし

つたのなもの。あの方はお約束をちがへるやうな人ぢやない。——でもどう

かなすつたんぢやないか知ら。昨日お目にかかつた時は大變お顔の色が悪か

つたから。——さういへばあの方の様子に變な所がある。何だか身體の悪い

のをかくしていらつしやるやうなところがある。——ああ心配になつて來た。

行つて見ようか知ら。行きちがひになつても困るし。どうしよう。(ふらふらと

玄関の扉口へ行きかける。)

(賑やかな話し聲。笑ひ聲が支那の方にきこえる。)

エレエナ。(はりついたやうに立ち止る。)

(スタホフ中尉、軍服。書記官クルナトウスキイを案内して入つて来る。)

スタホフ。(エレエナを見て。) おおエレエナ。お客様だぞ。——一等書記官、これが娘で、よろしくどうぞ。

クルナトウスキイ。(氣取つた様子で。) 改めまして、私が元老院一等書記官クルナトウ

スキイです。(手を出す。)

エレエナ。(いらいらする表情。黙つて手を出す。)

スタホフ。母あさんはどうした。

エレエナ。存じません。

スタホフ。存じませんといふ返事があるか。

夜の 前 の そ  
エレエナ。でも存じませんもの。——わたくし一寸失禮いたしますから。(行きかけ

二 スタホフ。(虎のやうに吼える。) 待て、何處へ行く。お客様をおいて失禮千萬な。

幕 エレエナ。ごめんなさい。別に御用はないだらうと存じましたから。

スタホフ。お客様を客間へ御案内申せ。——みんな何をしてをるのだ。(いらいらし

乍ら大聲に。) アンナ、ウワル。(老人トルコ椅子の上でパイプをくはへたまま、居睡りをして

ゐたが、この聲で眼がさめてひよろひよると前へ出てくる。スタホフに睨められて妙な恰好な乍

ら立止る。スタホフはどなりつづける。) バヴェル、ゾオヤ、ヴシリイ、ミンナ、ビ

ヨオトル、マアシヤ、

(聲に應じてアンナを先頭に、呼び立てられた男女六七人、客間から、エランダから、支那か

らおしあひへしあひ出て来て、がやがや罵り合ひ乍ら一同そこに整列する。)

一同。(殆ど同時に。) 御歸んなさい。ごきげんよう。

51 スタホフ。(むづかしい顔をし乍ら。) 一等書記官、これが妻で——(アンナを紹介する。)

52 アンナ。いらつしやいまし。

クルナトウスキイ。奥さん、一等書記官クルナトウスキイです。(探手する。)

スタホフ。エレエナ、御案内をなささい。

エレエナ。(此の間一人いらく苦悶の表情を見せてゐたが。)はい。(と、つんとした様子で先に立つ

て客間に入る。)

(書記官跡にこそ、こそついで行く。)

アンナをはじめ一同そろそろついて行かうとする。)

スタホフ。アンナ、待て、お前は行かずともいい。(残る。)

(一同そろそろがやぐついて行く。)

アンナ。(椅子にかけ乍ら。)あなた何の御用でございます。——一體今いらした御

客様はどういふ御身分の方でございます。(と客間の方を指す。)

スタホフ。(大股にそこらを歩き乍ら。)それ、それだからお前を呼んだのだ。(急に妻の傍へ寄

夜のそ

第 二 二 つて勿體らしい低聲になり。)先刻も言つた通り、あの方の名はエゴオル・アンドレイ

キッチ・クルナトウスキイ——元老院の一等書記官を勤めてられる——

幕 アンナ。ええ、それはもう分かりました。けれどその方がどうして——

スタホフ。まあさ黙つて聞けよ、話の順序といふものだ。そこで何故ああいふ方と

御交際を願ふやうになつたかといふと、俺もこれで家の事は随分考へてゐる

——變な、人を馬鹿にした眼附をするな。しよつちゆう俺が家を外に遊び歩

いてばかりゐる癖に、といふのか。俺は何も生れついて舞踏會や女の仲間が

好きだといふわけでも何でもないさ。だが家へ歸ればいつでもお前は心臓が

こはれましたといふやうな蒼い顔をして病つてゐる——

アンナ。ですからわたくし、何んにも苦情なんか申しはいたしません。

スタホフ。まあいいさ。俺の爲てゐることがいいか悪いか、時が自然に判断をし

てくれます。しかし乍らこれだけは記憶して置いて貰ひたい、俺はいかなる

53



場合にも自分の義務を知つてゐる、一家の家長として家のために何を爲さなくてはならないかといふことを知つてゐる。(段々演説口調になる。)そこでたとへばあのエレエナだ。娘だ。もう能加減に身を固めさせてもいい時分だ——つまり結婚させてもいい時分だと考へるのだ。あれは一體幾つになると思ふ——  
アンナ。二十歳です。

スタホフ。二十歳にもなつて何だ。變に慈善家がつて野良犬の子を可哀がつて見たり、乞食の娘と寝て見たり。さうかと思ふとこの頃は哲學だか文學だか、分かりもしない六づかしい本をひねくりまはして、まるで無我夢中に、美術家だ、哲學者だ、それからモンテネグロ人だか何だか素性のしれない外國の男なぞと巫山戯まはつてゐるやうだが——一體あれでいいのかい。どうももう少し人間並にふるまつてくれないと、しまひにはスタホフ家の家名にかかはるやうなことになるのだ。

アンナ。まあ、あなた。

スタホフ。ま、もう少し静かにして聞きなさい。ところで話が横道に外れないやうに簡単に言ふがね。俺はつまりあの(と客間を指す)若い紳士を家の聲にしよるかと思つてね、それでこれからも精々親密に交際をして行きたいと考へたのだ。どうだ、お前、あの人をどう思ふ。俺の判断は恐らく偏頗でもない、輕躁でもないと考へるのだ。あの人はまだ年はたしか三十三、若い——とはいへないが、決して年をとりすぎはしない、それで最高等の法律學校を卒業して學問は十分にある、禮儀作法は正しいし、一等書記官で大學の評議員で、スタニラスの頸章を授つてゐる人だ。——だがおい断つて置きますよ。俺は位階とか勳章とかそんな事に眼のくれる世間並の父親とはちがふのだからな、ただお前がいつも、エレエナは實世間に活動する人物が好きだといふから、このクルナトウスキイさんのやうな世間に幅のきく人物こそほんとうの

理想的な夫といふものだらうと思ふのだ。それにかういふことがある。エレエナは慈善を施すことが大好きだといふだらう。所でこのクルナトウスキイさんは御自分の収入で十分生活の保障がつき次第、いいかい、ここだよ、生活の保障のつき次第、直ぐお父さんからゆづられる筈の財産を、全部兄弟の人達に分けてやつてしまふおつもりなのだとき。どうだい、立派な慈善だらうぢやないか。

アンナ。それで、そのお父さんと仰しやるのは――

スタホフ。お父さんかい。これがどうしてまた仲々のえら物でね、非常に厳肅なストイックといつていい道徳家だ。その氣象が息子さんにも傳はつてゐる。

何しろ元が退職の少佐だ――

アンナ。で、今は――

夜のそ  
スタホフ。今か、今はね、シゴオルスキイ伯爵家の領地の總管理人をしておいで

第 だといふことだが――

二 アンナ。へええ。

幕 スタホフ。へええだ。何がへええだ。人のいふことをまだ茶にしてゐるのか。

アンナ。あら、何も申しはしないぢやありませんか。

スタホフ。何、いはんことがあるものか。まあ、何でもいいさ。ごのみち俺の意見はさうと心得てゐてもらひたい。それでもう御馳走の用意はできたか。特別に注意して粗略のないようにして貰はんと困るぞ。モンテネグロあたりの渡り者とはお客がちがふのだかららな。

アンナ。(食堂の方を一寸ふり向いて) ええ、もうとうによろしいのですよ。料理番の

ヅンカに言ひ付けてすつかりフランス風にお料理をさせましたから――

スタホフ。そんなことは俺には分からん――。とにかくお客様をエレエナやバウ

エルに任せきりにして大變長く失禮してしまつた。いけない。いけない。

(急にあわてて帯剣をがちやがちや言はせ乍ら、そそくさと客間へ出て行く。)

アンナ。(呆れた顔をしてしばらく跡を見送つてゐたが、やがて太息をついて物臺さうに立ち上がり、食堂をのぞいて中に向つて何か言ふ様子。また戻つて来てそこらを見廻し、椅子、什器などの位置を直して、これも客間へ入つて行く。客間では先刻から時々話聲や笑聲がおこつてゐたが、段々賑やかになつてくる。)

アンナが入ると間もなく、また一しきり盛んな笑聲がきこえて、書記官クルナトウスキイ、スタホフ中尉、アンナ、つづいて出てくる。その跡からシユウビンとウワル老人とゾオヤも出てくる。)

アンナ。ではどうぞ直ぐに食堂へ――

クルナトウスキイ。さうですか、これはどうも――(そこらを見廻し。油繪額を見て。)ほう、

コンスタンチン大公。仲々、立派に描けてゐますね。

スタホフ。何ですか、わしには美術のことはあまり分らんが、筆勢は見事だと思ひます。

夜のそ

クルナトウスキイ。御同様に美術といふ奴はどうも――(シユウビンを尻目にかけて)いや

吾々實務に没頭してゐる人間は可哀相ですよ。はははは。

(白服の給仕。食堂の戸を内から開く。クルナトウスキイを先に皆々入る。)

シユウビン、肩を登してクルナトウスキイの態度を真似てゾオヤを笑はせる。ウワル、勿ほらしい顔をしながら指を振つて、みんな跡から入つて行く。

一しきり座席を定める騒がしい物音。玻璃器と陶器と金属とのすれ合ふ音。やがて笑聲と話聲とが緩い單調なリズムをなして流れて行く。

舞臺しばらく空虚。

細い少女の聲。(園の樹立の中からきこえる。)

唄

「眼のない鳩さん、何處行きやる。

巢をぬけて何處行きやる。

かはいやこがれて飛んで行く、

雪の野道に果てはない。

『眼のない鳩さん何處行きやる。

野を越えて、山越えて、

知らぬ世界があるかいな。

碧の空があるかいな。』

ねえさん、ねえさん。エレエナねえさん。

(園の茂みの中から盲目の乞食少女カアチャ、姿を現はす。やがてエランダの上まで上つて来て、そこらを歩きまはる。低い聲で鋭く。)

ねえさん、ねえさん。エレエナねえさん。(と呼びまはる。返事がないので首をうなだれて、すこすこ下りて歸つて行く。やがて小さい姿は樹の間にかくれる。)

エレエナ。(園に向つて小聲に。)カアチャ、カアチャ。カアチャは何處へ行つたの。

歸つたのかしら。カアチャ。可哀さうに——ほんとうにもうインサロフさん

はいらつしやらないつもりかしら。(と呟きながらエランダへ出る。)

(すれちがひにエランダを上つて来るベルセネフと出會ふ。)

エレエナ。ああ、アンドレイ。ペトロキツチ、どうなすつて。

ベルセネフ。あなたこそ何處へ。

エレエナ。いいえ何でもないの。今しがたカアチャがいつもの唄をうたつて来たやうでしたから、出て見たのですけれど、見えないんです。

ベルセネフ。ああ、あの乞食の娘ですか。今、そこで逢ひましたよ。あきらめて歸つたのでせう。——今日はお客様ですか。大分賑かなやうですね。

エレエナ。ええ、一寸ばかりお客なの。

ベルセネフ。ちやあ、また。失禮しました。(そそくさと出て行かうとする。)

エレエナ。(あわてて、ベルセネフの手を握りしめて中へ引するやうにし乍ら。) いいえ。いいんですよ。いいんですよ。今食事の最中なんですから。——まあおかけなさいな。(無理にトルコ椅子にかけさせ、自分も傍に坐る。)

エレエナ。(ひしと男の傍に身體をよせ、ぎゅつと緊く男の両手を掴んで、きはひ込んで言ひ出す。) さあ、うかがひますわ。アンドレイ、ペトロキッチ、あなた、あたしにお話があつていらしたのでせう。

ベルセネフ。ええ。——でも、どうしてそれを。

エレエナ。まあそんなことはどうでもいいんです。さあ話して下さい。いいえ知つてをりますわ。あなたが急なお話があつていらしたといふことはあなたがいらした時から——

ベルセネフ。さうですか。——ちやあ、かういふ譯です。エレエナさん、インサ

第 二 幕  
ロフが今日こちらへ上がりましたか。

エレエナ。いいえ、いらつしやる筈のお約束なんですけれど——

ベルセネフ。インサロフは今日旅に出るさうです。直ぐここを、私の宿から立つて行くさうです。

エレエナ。(痙攣的に。) え。デミトリ・ニコノロキッチが、旅に出る、——今日直ぐ、ここを、立つて。——あの、お暇乞ひにもいらつしやらずに。——それはどうして。え、何故です、何故です。(立ち上がつて歩き廻る。)

ベルセネフ。御存じのとほり、あの男は何をするにも、かうかうだと譯を話したことのない男です——だが、僕の考では、まあ、エレエナさん落着いて下さい。大層顔の色がわるい。とにかく僕の考では、だしぬけに旅に出るといひ出したのには何か譯がある——

エレエナ。え。譯がある。何です、何です。(と言ひかけて緊く、ベルセネフの手を握り乍ら

傍に坐り、ふと何か思ひ出した様子で。ああ、でもチミトリ・ニカノロキツチはいつか  
もふいと行方しれずになつたことがありましたわ。

ベルセネフ。ええ。でもあの時は二人も仲れがありました。

エレエナ。さう、やつぱりブルガリアの方ですつてね。あんまり風體のよくない男  
達だつて、チミトリは自分でさう言つて笑つていらつしやいましたわ。やつ  
ぱりお仲間の方なんですつてね。——それでこちらへ來てゐるお仲間同士の  
喧嘩ができたのでその仲裁に出ていらつしたんだつてね。

ベルセネフ。あの男はさう言ひましたか。

エレエナ。ええ。それからまだいろいろお仲間の人達の大運動を計畫してゐるお  
話を。みんなびつくりするやうなことはかりでしたわ。——けれども、あの  
時はふいと立つていらつしたけれど、三日ばかりして直ぐお歸りでしたわ。  
今度だつてそんなことなんでせう。

ベルセネフ。それならいいが、——どうもさうらしくは思へません。今度はまる

つきり一人です。ブルガリア人も來ませんでした。しかもこの頃は今日の先

刻まで、毎日あなたのお宅を訪問するのと、ブルガリア語の本を読む外には  
何の事もない、平穩無事な日を送つてゐたのですからねえ。

エレエナ。(顔色を變へ乍ら咳くやうに。)では何でせう。わかりませんわ。

ベルセネフ。(寂しく微笑し乍ら。)さあ、何といつたらいいでせう。——ですがかうい  
ふ話があるのですよ。話は昔にかへるが、今年の春でした、僕がはじめてイ  
ンサロフと知り合ひになつた時分です。或晩、親類の家であの男と一所にな  
つたことがあります。すると、その親類に一人、非常に美人の娘があつた。  
どうもこの娘の器量にはさすがのインサロフも參つたらうと思つて後できい  
て見ると、ただ笑つて言ふには、君の推量は當たつてはゐない、僕はまだそ  
れほど心を動かされてはゐない。だが萬一、ほんとうにそんなことにでもな

つたら、僕は即座に危険地帯を退いてしまふ。何故といふに、自分一個の私の快樂や幸福のために、一生を賭けた、國民のための義務や事業を犠牲にすることはできないからなあ、と言つて、その跡で「僕は一個のブルガリア人だ、ロシアの少女を愛する必要は毫末もない」と結びました。

エレエナ。でも——そんなことが何も——あなた——

ベルセネフ。關係したことでない、とあなたは仰しやるのですか。どうして、僕はその時のことが、今度は愈本當になつたのではないかと思ふのです。——

エレエナ。ではあの……あなたはそれがあたしに……ああ、もう後生だから何んにも仰しやらないで下さい。

夜の 前 所  
ベルセネフ。さうです、本當になつたのです。インサロフは今、一人のロシア少女を戀するやうになつたのです。それでいつぞやの誓言を守つて、直ちに立ち去らうと決心したのだと思ひます。

第 二 幕  
エレエナ。まあ、アンドレイ。ペトロキツチ——

二 (突然食堂の方で三四人どつと笑ひ崩れる聲。二人ぎよつとして立ち上がる。)

幕 終  
ベルセネフ。(急に帽子を手にとつて。) ああ、お客様でしたね。僕は歸らなくてはなりません。ではさようなら。(行きかける。)

エレエナ。(あわてて追ひすがり乍ら男の手をとつて。) ベルセネフさん、あたしあなたにはほんとうに濟まないと存じてをりますわ。あなたはほんとうに御親切な、天使のやうな方ですねえ。——(口ごもり乍ら。) でも、でも、あの方ほんとうにもう一度来て下さるでせうか。

ベルセネフ。(沈痛な調子で。) 來たいでせうか。——來ればあの男の決心が無駄になります。——エレエナ、あなたはそれほどまでにインサロフのことを思つてゐるのですね。

エレエナ。ええ、ベルセネフさん、——勸忍して下さい。

ベルセネフ。勘忍かんにんすることは何なにもないでせう。——ただ正直しやうじきにお話はなしすれば僕ぼくは今いま、くらやみのどん底そこにつき落おとされたやうな氣きがします。——エレエナ、僕ぼくもあなたを愛あいしてゐたのです。けれども——みんな夢ゆめです。夢ゆめです。さようなら。  
(つと駈かけて行く。)

エレエナ。ああ。ベルセネフ、待つて下さい、待つて下さい。——ほんとうにあの方かたは、インサロフさんはもういらつしやらないのだらうか。(よろよろとこるぶやうに長椅子ながいすの上に身體からだをうづめて突つつ伏ふす。)

(食堂しょくどうの方がまた騒さわ々ざしくなつて席せきを立ちかける氣配けいがする。エレエナ、物音ものおとと一所いしょにつと彈はね返かへるやうに飛びおきて、客間きやくまに入る。直ぐ帽子ぼうしを冠かぶり、夏外なつての套たうを被かいだまますりぬけるやうに聞きへかけ下くだりて行く。雲くもが低ひく下くだりて來きて、そこら暗くくなる。ヒユツ、ヒユツといふ風かぜの音おと。微こかに遠雷とんらい。

エレエナの出でて行いくと殆たいていど入れちがひに食堂しょくどうの扉かどがあいて一同話いっとなし乍はなら、ぞろぞろと出でて來きる。)

第 二 幕  
クルナトウスキイ。(スタホフと並ならんで歩あるき乍はなら)さうです。何なんにして吾われ々れロシア人じんに一番ばん

二 缺かけたことは、或あるる確かくとした主義しゆぎの下もとに働はたらくといふ思想しきうですね。一切さいの虚飾きよしやくを捨すて、赤裸せきら々な自己じこの力ちからを資本しほんとして働はたらくといふ思想しきうですね。全體ぜんたいロシア

人じんは學問がくもんとか、藝術げいじゆつとか、贅澤ぜいたくな空想くうさうに祟たられすぎてゐます。

スタホフ。どうも藝術げいじゆつなんぞをやる人間じんげんは、その日ひぐらしの、主義しゆぎも何なにもない奴やつが多い。

クルナトウスキイ。さうです。どうも全體ぜんたい藝術げいじゆつなんといふものは國民こくみんを浮華うきわに導みちびいていけない。國家こくがが幸さいひに治をさまつてゐればこそ、かやうな餘計物よけいものも存在そんざいして行くのです。

シユウビン。ですが藝術家げいじゆつかはいくらやくざでも賄賂わいろはとりません。やくざなお役人やくやくじんは賄賂わいろをとります。

クルナトウスキイ。(高壓こうあつ的に)賄賂わいろをとる者ものが必かならずしも罪人ざいにんではない。萬止ばんやむを得



ずしてとる場合があるのです。

シユウビン。では賄賂も主義に依つてとるのですね。

クルナトウスキイ。馬鹿な。ただ賄賂をとる者の境遇にも同情すべきことがあるといふだけだ。だが、事情はいかにあらうと、一度それが發覺したときは容赦なく所罰しなければなりません。

シユウビン。では罪のない人間を罰するわけですね。

クルナトウスキイ。さうです。それも主義のためです。

シユウビン。どうか失禮ですが、その主義といふものをもう少し説明していただけませんか。

クルナトウスキイ。(口籠り乍ら。)それは、その——いや、説明するまでもないことだ。スタホフ。勿論、説明するまでもなく分かつてゐる。——それはさうと、エレエナはどうした。先刻から見えないぢやないか。お客様に失禮ぢやないか。

夜の幕

第 二 幕  
アンナ。多分室にゐるでせう。頭痛がすると言つてゐたからどうかしてゐるかも

しれません。シユウビン、お前さんたち、見てきておくれ。

(シユウビン、ウウル、ゾオヤみんについて客間の扉から出て行く。)

(風はげしくなる。大粒の雨の音。)

スタホフ。おお、ひどい天気になつたな。どうせ直ぐはお歸りにはなれますまい。

おお、クルナトウスキイさん、是非一つあなたに御批評を願ひたいものがある。アメリカからとりよせたばかりです。(そそくさと客間の方へ行きかけて、妻なかにへりみ。)アンナ、お茶の支度を——(と出て行く。)

アンナ。はい。(客に目禮して食堂の方へ出て行く。)

(クルナトウスキイ一人椅子に凭りかかつてひまさうに欠伸をする。)

ふと食堂の扉があいてゾオヤが顔を出す。)

71  
ゾオヤ。(半身のり出して。)エレエナさんは見えません。(と言ひ乍ら客一人なのを見て。)お

や、失禮。(と引込まうとする。)

クルナトウスキイ。君、君。(と呼ぶ。)

ゾオヤ。(立戻つて氣どつた調子で。)あの何ぞ御用でございますか。

クルナトウスキイ。まあここへ來たまへ。

ゾオヤ。はい。(傍へ来る。)

クルナトウスキイ。さあそこへ。(急に少女の手をつかんで傍に坐らせる。君は何といふの。)

ゾオヤ。ゾオヤ・ニキチシユナ・ミユルレル。

クルナトウスキイ。おお、君の生れはドイツだね。

ゾオヤ。いいえ、父うさんがドイツ人でした。

クルナトウスキイ。さう、それぢやあ、音楽がうまいだらう。手を見せたまへ。(ゾオ

ヤの手をしっかりと両手でおさへて。)可愛い手だね。弾けさうな手だ。(と手に接吻しよう

とする。)

夜の前の

第 二 幕  
ゾオヤ。あら、御冗談を。

クルナトウスキイ。冗談ぢやあない、ほんとだよ。(少女の手を抑へたまゝ立ち上つて。)僕

は君が氣に入つたよ。この嬢さんは厭にすました女だね。——さあ、二人で

弾かう。(と無理にゾオヤをピアノの前に坐らせる。鍵盤をあげてやつたり楽譜を開けてやつたり

する。)

ゾオヤ。(うれしそうに。)何を弾きませう。

クルナトウスキイ。何でもいいさ。君の心意氣といふやつを聞かうぢやないか。

ゾオヤ。ぢやあウエベル、それともベエトオエンがいいかしら。(とピアノの鍵盤

をたたいて調子を見る。)

クルナトウスキイ。ウエベルでも、ベエトオエンでも、何でもいいさ。僕はそれ

よりか君の——(といふとき、突然けたたましい雷の音。ゾオヤ思はず叫びこゑを立てて立上る。

その首を抱いてクルナトウスキイしたたかに接吻する。この時食堂の扉がいて、給仕が茶器を運

んで来る。クルナトウスキイあわてて少女を抑へた手をはなして立上る。雷鳴、電光。

幕。

## 第二場

モスクワ河岸。往來の小禮拜堂。

右手路傍に、枯井の上にさしかけて作つた、半壊の小禮拜堂。

疎らな白楊樹の立木五六本。迂曲した河身。

河をへだて、遠景は一面にたわゝに實つた金色の穀物畑。會堂、人家、風車などロシアの田舎に於ける初秋の風物を點綴すること。

大雷雨のあとの心持。

雨まだ全くは止まず、折々に速雷、電光。

小禮拜堂の中に、エレエナ、先刻の乞食少女カアチャを膝に引き寄せて話をしてゐる。

エレエナ。(身體をのびして外をうかがひ乍ら。) ああ、雨はまだ仲々止みさうもないね、困つてしまふねえ。

カアチャ。(眼が開いてゐて見えない、その眼を見張つて。) ねえさん、ねえさん、歸つては厭だよ。あたい寂しいんだもの。

エレエナ。でもねえさんはこれから遠い所へ行く人を見送りに行かなくてはならないのだよ。だがこの雨では困つたねえ。——お前何をもぐもぐ喰べてるの。カアチャ。(かちつてゐる黒パンのかけらを見せる。) これ。

エレエナ。まあいやだ。それをばさんに貰つたの。

カアチャ。ううん。をばさん呉れるものか。あたいが持つてるものみんなとつて  
 しまうのだよ。かくして置くとぶたれるんだよ。昨日もぶたれた。ね。(腕を  
 出して見せる。)

エレエナ。まあほんとうに腫れ上がつてゐるよ。可哀相に。

カアチャ。ねえさん、神様のところへ行くと樂ができるつてほんとうなの。あた  
 い、早く神様のところへ行きたいや。

エレエナ。まあ何をいふの。

カアチャ。でもあたいたい神様のところへ行つちやつたら、ねえさん来てくれないだ  
 らう。ええ。やつぱり来てくれる。

エレエナ。ああ行つてあげるともね。

夜のそ  
 カアチャ。さう。うれしいよ。——あたいうち帰らう。をばさんに叱られるから。

(急に卑しい様子をして。)—ねえさん、何か下さいな。お錢がいいや。ね、ね、ね。

二 エレエナ。(ポケットをかき探つて。)ああ。生憎だつたねえ。あんまりいそいで出て來

幕 て、何にも持つてこないのだよ。

カアチャ。よう、よう。おくれよう。

エレエナ。だつて何んにもないのなもの。ちやあ仕方がない。これでもあげよう。

(ハンカチをやる。)

カアチャ。なに、ハンカチ、うれしいな。きつと赤いんだね。しめつてるよ。こ  
 んなに。ねえさん、また泣いたの。何がそんなにかなしいの。をばさん、ねえ  
 さんをぶちはしないでせう。

エレエナ。さうぢやないんだよ。ねえさんは少し人のことでね、——ねえさんの  
 大事な人のことでね心配してゐるんですよ。

77  
 カアチャ。ねえさんはいつとも人のことで苦勞してゐるの。その大事な人つて、男

の人なの、女の人なの。

エレエナ。男の人さ。

カアチャ。男の人。お父うさん、をぢさん——さうぢやないや。ああ旦那なの。

ねえさんの旦那なの。まあ、ねえさんお嫁に行くの。

エレエナ。ほほ、何を言ふの。

カアチャ。さうだ、お嫁に行くんだ。ぢやあもう、ねえさん、お寺へは行かない

のね。お寺へ行って尼さんになるつてもう嘘なのね。

エレエナ。ああ、ねえさんはお寺よりもつと遠い、もつと賑やかな所へ行つて仕

事をしなければならぬのだよ。

カアチャ。さう、ねえさん遠くへ行つてしまうの。つまらないね。あたいは神様

のところへ行くの。あたいは歸らう。

(月が薄くばつと射し込む。)

## 幕 二 第

ああ日が出た、日が出た。さようなら。

エレエナ。氣をつけておいでよ。さようなら。

カアチャ。(小聲に歌つて行く。)

「眼のない鳩さん、どこ行きやる。

野を越えて山越えて

知らぬ世界があるかいな。

碧の空があるかいな。」

エレエナ。(うつと見送る。ああ、さうだ。あたしは行かなくつちやならない。

何をぼんやりしてゐたらう。(あわてて外套を被いで立ち上る。)

(すれちがひにインサロフ、旅支度に小革嚢を携へて、頭を深くうなだれたまゝ、急ぎ足にエレエナの前を駆けぬける。)

エレエナ。(ふと気がついて小こゑに。) インサロフ、インサロフ——(聲の立たぬ表情。) ああ、やつぱりさうだ。ヂミトリ・ニカノロキッチ——何處へいらつしやるの。ああ、いけない、いけない。(絶叫する。) チミトリ・ニカノロキッチ——(駈け寄る。)

インサロフ。(やつと気が附いて振り返りそこらを見まはし、つかつかと傍に寄つて来て。) え、何です——(やつとエレエナを認めて。) おお、エレエナ、あなたでしたか。あなたでしたか。

エレエナ。(黙つて小禮拜堂までもどつて来て階段に腰を下す。)

インサロフ。(エレエナの跡をついて来てやはり眩くやうに。) あなたでしたか。あなたでしたか。(と落着かない様子できよとく見廻はす。)

エレエナ。(むしろ静かなさぐるやうな眼付をして男の顔を見上げ乍ら。) あなた、あたしの宅へいらつしやるどころでしたの。

インサロフ。え——いいえ、さうではありません。

第 二 幕  
 エレエナ。でも今日は一時前にいらつしやるお約束でしたから、あたしは今までお待ち申してをりました。待つて待つて待ちくたびれてをりました。

インサロフ。それはどうも——  
 エレエナ。急に御旅行の御様子ですね。どちらへいらつしやるの。ベルセネフさんにかがひましたわ。

インサロフ。ベルセネフが言ひましたか。で、何處へ行くといひました。  
 エレエナ。何處でせうか、それはあなた御自身から伺ふ方がいだらうと仰しやいましたわ。多分御立ちの前にはもう一遍お目にかかれるだらうと思ひましたからね、せめてお別れの御挨拶だけは、なすつて行らつしやるだらうと思ひましたからね。

インサロフ。でもさうも行かないので——

81  
 エレエナ。え。さうも行かない——ほんとうに。ではやつぱり黙つて行つておし

まひなさるおつもりでしたのね。もしや——と思つたことがほんとうだつたのですね。これほどお心やすく、おなじみになつて頂いた跡で、お——暇乞にもいらつしやらなければ、何處へ行くといふ行先も仰しやらずに……このまま飽氣なく私達はお別れしなければならなかつたのでございますね。ここで偶然お目にかからなかつたら、このまま事に依ると永久のお別れになつてしまふかもしれないところでしたのね。……インサロフさん、わたくし、お恨めしう存じますわ。

インサロフ。(傍の石に腰を下し乍ら俯向いたまま) エレエナさん、勘忍して下さい。さう仰しやられるまでもなく僕は心苦しくつてたまらないのです。これだけの決心をするまでは、仲々容易のことではなかつたのですよ。少しは察して下さい。

エレエナ。いいえ、察したくはございません。ええ、察してなんか上げるもので

すか。——全體何して旅へなんか行らつしやるのです。それは何れ餘儀ない事情がおあんなさるのでせうね。またそれでなくつて、こんなに友達に悲しい思ひをさせて平氣で行つておしまひなさるわけがありませんもの。でも一體こんなにして友達同志別れることが出来るでせうか。いつか、さうです、湖水へ遊びに行つた明るる日の朝、二人で散歩しながらお約束をいたしましたね、私達はいつまでもいつまでもお友達になつて助けあつて行かうつて——

インサロフ。ええ。

エレエナ。そしてその時あたしが薔薇の花が好きだと言つたら、あなたは僕も大好きだと仰しやつて、そこに咲いてゐた白薔薇を二輪摘みとつて、これはお友達のしるしだと言つて、お互ひの胸に一輪づつ差して別れたことをおぼえていらしつて——

インサロフ。おぼえてゐます。

エレエナ。その時の薔薇は後の記念と思つてちやんとしまつて置きました。その薔薇の花はしぼんでも、形はのこつてをりますわ。けれど私達はもうお友達ではなくなつたのでせうか。

インサロフ。さうです。もう友達ではありません。

エレエナ。え。ぢやないんですつて——

インサロフ。さうです、私達二人はもう友達といふだけのものではないのです。

だから僕は去らなくてはなりません。

エレエナ。(咳くやうに。)まあ何故でせう。

インサロフ。何故といつて、この上を言ふのは苦痛です。僕にはできない。

エレエナ。何故仰しやれないんでせう。いつかちゆうはあんなに別けへだてなく

何でも話して下すつたくせに——

夜の 前 の そ  
インサロフ。さうです。あの時分は何んにもあなたに對して言ふを憚るやうなこ

第 二 とがなかつたのでした。けれども今は——

二 エレエナ。今はどうして——

幕 インサロフ。さうです、今は——いやもう行きませう。ではさようなら。

エレエナ。(落着いてむしろ冷やかに。)まあさう、ではお別れですか。けれどせめてこ

こでお目にかかつたしるしに——(手を差出す。)

インサロフ。(手を出しかけて急に引込ます。)

エレエナ。え。いけないんですつて。

インサロフ。いけません、いけません。ではさようなら。(あたふたと小禮拜堂を出よう

とする。)

エレエナ。(つと立ち上がつて。)ヂミトリ・ニカノロキツチ、まあ待つて下さいな。もう

ほんのしばらくでいいの。ヂミトリ、あなた、あたしがこはくなつたんでせう。

85  
けれどあたしはあなたを恐れませぬわ。あたしあなたよりはよつほど勇氣が



ありますわ。……さうですとも——ああ、もうかまはない、あたし言ひますわ——あなた一體あたしがどうしてこんなところに来てゐるとお思ひなすつて。——あたし何處へ行くつもりで出たとお思ひなすつて。

インサロフ。さあ。

エレエナ。あたしあなたのお宅へ上がるつもりだつたのですよ。

インサロフ。え。僕のところへですと——

エレエナ。ええ、さうなの。あたし、あなたといふものがなくては、もう一時間もゐられないやうな氣がするんですもの。あなたが旅に出てしまふ——どこかしらない、的もない旅に出てしまふ——何といふおそろしいことでせう。その跡に何が残ると思つて。だらしのないくせに自分勝手な父うさん。しよつちゆう心臓をおさへてゐる氣の毒な母あさん。墓蛙のやうに肥つたウワルをぢさん。——それからおつちよこちよいのシユウビン——

インサロフ。ベルセネフがゐます。

エレエナ。ああ、ベルセネフ。あの人はいい人ですね。親切な、眞實な、立派な

紳士ですね。けれど、けれど何だか物足りない、熱がない、じり、じり人を

やくやうな——（顔をかくして。）あゝ、ヂミトリ・ニカノロキチ、あなたはどうしても、どうしても、あたしに——あなたを愛してゐると、愛してゐると言はせたいのねえ。あなたを、愛して、愛してゐると——ああもう言つてしまひましたわ。（自分の胸に顔を埋める。）

インサロフ。エレエナ。（と思はず女の手を握らうとして手を差出す。）

エレエナ。（男の出した手をギユツとにぎりしめて、俯向いたま、顔を男の胸に埋める。）ヂミトリ、

あたし嬉しくつて——

インサロフ。（堅く女を抱きしめたまま。）エレエナ、僕もうれしい——

（長い情味のある沈黙がつづく。）

インサロフ。(しづかに女の身體を離して、優しく肩に手をかけたまま、小禮拜堂の階段まで来て並んで腰をおろす。) エレエナ、考へると夢のやうですね。僕はこんなに早くとは思ひませんでした。

エレエナ。ええ。ほんとうにこんなに早くとは——。でもあなたはあたしをおそれて逃げて行かうとなすつたのですわ。

インサロフ。ええ、——ですが今でも僕にはまだおそれがあります。あなたはかうした跡で直ぐ後悔するやうなことはないでせうか。ああ止せばよかつたと思ふやうな時が来ないでせうか。

エレエナ。まあ、何を仰しやるの。あたしはもうとうからあなたのものなのですわ。あなたのことの外には、ブルガリアの國の外には、何んにも思ふことも、心配することもなかつたのですわ。お止しなさいよ、そんなことはもう——

インサロフ。けれど私達の結婚は世間の結婚のやうに、安樂な平和な家庭の幸福

へ導くものではないのですよ。それどころか却つて、苦行と窮厄の門に入る第一歩を踏み出すものなのですよ。

エレエナ。それは覺悟してゐます。

インサロフ。ではもうこれから先き、どんな恐ろしい運命の導く方へでも僕と一所について行きますか。

エレエナ。ええ、行きますとも、何處へでも行きますわ。世界の終てへでも、あなたと一所なら行きますわ。

インサロフ。でもあなたは、自分にも危つかしいことを、強ひて自分を欺いて言つてゐるのだとは思ひませんか。二人が今結婚するといへば、御兩親の御不承知なのは、分つてゐるでせう。

エレエナ。いいえ、少しも自分を欺いてゐるとは思ひません。何もかも承知してゐることです。

インサロフ。それから僕の貧乏で——殆んど乞食同様の身分だといふことも承知でせうね。

エレエナ。それも承知ですわ。

インサロフ。それから僕のロシア人でないことも、ロシアには長くゐられない身分だといふことも、従つてあなたには、本國とか、身内とか、祖先とか、さういふものにながれた一切の羈絆を絶つてもらはなくてはならないといふことも。

エレエナ。承知ですわ。承知ですわ。ロシアはもうわたしの故郷ではないのですもの。

インサロフ。まだあります。一番大事なことがあります。僕は今、世間の人間とはちがつた仕事をしてゐるのですよ。徒らにこの一身を勞するばかりで、何の報酬もない仕事をしてゐるのですよ。僕は——いや、僕ばかりぢやない、

僕達の仲間、ただに危難を冒すだけぢやあない、迫害に苦しみ、汚辱をうけ、其の上になた——

エレエナ。ええ、分りました、分りました。みんな承知してをりますわ。あたしはただあなたを愛して——

インサロフ。いや、そればかりではない、何よりもあなたは今日まで二十年持ちつづけた生活を、からりと捨てて、たつた一人ぼっち、知らぬ他郷の人間の中に交つて、事に依ると苦しい勞働までも一所にしなくてはならない——

エレエナ。(急に男の口を押へて)もういいわ、もういいわ。あたしはあなたを愛してゐる、それが一切なのですわ。ねえ、あなた——

インサロフ。ありがたう、エレエナ—— (いきなり女の手をとつて熱情をこめた接吻をする。女は優しくうつとりとした眼をして遠方をながめ乍ら男のするまゝになつてゐる。果てしらぬ接吻と抱擁と。——ふと、女は急に恥かしさうに、ひしと頭を男の胸につけてとりすがる。)

インサロフ。(やさしく女を抱いたまま女の顔をうつむけて、じつとその眼に見入りながらしづかに)

エレエナ、わたしの小さい妻——

(長い長い接吻と抱擁。)

エレエナ。(振り離して立上り)。厭ですよ。厭ですよ。(につこりし乍ら亂れた髪をかき上げる)  
まあこんなにしてしまつて。

インサロフ。(同じく立ち上つてそこらを歩き廻り乍ら)。エレエナ、お互にいつまでも今日  
の此の幸福な一瞬間を忘れますまいね。

エレエナ。ええ。どうして忘れることが出来るでせう。けれどこの一瞬間が私達  
の幸福の最後ではないのですよ。

インサロフ。けれどねえ、考へると私達の前途には幸福と一所に恐ろしい苦痛が  
待つてゐる——。

夜の前のそ

エレエナ。何ですわねえ、そんなこと。幸福も苦痛も私達の間を餘計にしつかりと

結び付けるだけですわ。私はあなたの妻なのですもの。

インサロフ。それだけに、これから二人生きて家庭の生活らしいものを樂しむ時  
のないのが——

エレエナ。ないのが苦痛だと仰しやるの。

インサロフ。その苦痛が實はもう眼の前へ來てゐるのです。エレエナ、僕がこの  
國にお暇乞ひをするのもほんとうに遠くはないのですよ。

エレエナ。まあ、ではお國へお歸りになるのですか。

インサロフ。さうです、私達同志が久しい間辱を忍んで待つてゐた一大事の機會  
が今やつと來たのです。このロシアの國とトルコとの間の長い葛藤が今度と  
いふ今度こそ愈々戦争にならなくてはならない形勢になつて來ました。ロシ  
アの軍隊はブルガリア公國を占領しました。トルコ政府から何度撤兵の抗議  
を受けてもびくともしない様子です。そればかりか國境のクリミヤ半島では

セバストポオル要塞の守備兵を毎日のやうに増員して、萬一を待つてゐます。暴虐なトルコを倒して積年の怨みを報ゆるのはこの時だ。本國の獨立を回復してブルガリア大帝國の昔に返すのはこの時だ。立て、立て——といつて本國の同志からしきりなしに手紙をよこすのです。——しかしよく考へて見ると、今がほんとうにその時機だらうか。まだ早い、まだ早いといふ氣がするのです。——けれど同志の運動はすすん進んでゐる。のるかそるか、やるところまではやつて見なくてはならない。何事も天命です。

エレエナ。では何時おたちになるの。

インサロフ。もうさうきまれば一刻も猶豫はないのです。ぐづぐづしてゐると歸り道をふさがれてしまひますからね。

エレエナ。あたしも連れて行つて下さるでせうね。——あたし早くブルガリアといふところへ行つて見たい。

インサロフ。勇ましい、よく言つてくれました。けれど女が戦争には出られませぬ。

エレエナ。でもあたし一人でのこつてゐるくらゐなら、死んでしまひます。

インサロフ。分かりました。あなたの言ふことなら私は何んでもきかなくてはならないやうな氣がします。

エレエナ。では、つれて行つて下さるのね。あなたさへよろしかつたら、あたしこのまま直ぐにでも御一所に参ります。もう家へなんか歸らなくつてもいいわ。インサロフ。まあさう急かずに、直ぐといつても準備もあります。旅行券も要るし、金も要るし。お父うさんやお母あさんの立派なおゆるしも得て行きたい。私達は駆落者のやうにして行きたくはありませんからね。

エレエナ。(急にしながら) あのお父うさんがゆるすでせうか、それに旅行券に、お金——お金ならわたし持つてゐますわ、八十ルウブルばかり。

インサロフ。それだけで足りもしないでせうが、あれば尙結構です。

エレエナ。けれどあたしもつと出来ますわ。借りて來ますわ。母あさんに言つて。

いや、母あさんには言はないはうがいいかしら——では時計を賣るわ——耳環を賣るわ——腕環も——レエスも——。

インサロフ。ありがたう。ありがたう。(次第に陰鬱な苦痛の表情。)

エレエナ。(うつとりとして。)ほんとうに二人一所に旅行をしたら、どんなに楽しいでせう。——(ふと男の様子に気がつく。)おやお、あなた、どうなすつて。お氣分が悪くつて。あんまり、あたしが一人ではしやいであるものだから、お氣を悪くしたのではなくつて——ええ。

インサロフ。いや構はないでおいて下さい。何んでもないのです。何んでもないのです。あんまり先刻から興奮したので、少しのぼせるやうな氣がするだけです。(頭を押へる。)

エレエナ。まあまつ蒼な顔をして。どうしたんでせう。御病氣ぢやないんです

か。

インサロフ。ええ。少し——

エレエナ。まあ御病氣だつたのですか。すみませんわ。あたしちつとも知らないものだから——

インサロフ。大した事はないのですが——

エレエナ。でも大事なおからだですわ。——いつ頃から。昨日から、一昨日から。それとも前から。

インサロフ。ずつと前からです。——エレエナ、勘忍して下さい、僕の病氣は生れつきです。不治です。(胸を押へながら沈痛な聲で。)エレエナ、僕のからだには肺病があるのですよ。

エレエナ。肺病——

インサロフ。驚いてはいけません。それがこの頃ほんたうに出て来たらしいのです。僕もそれを心配したのです。あなたは僕が恐れて逃げたと仰しやるが、恐れて逃げた理由には、あなたの爲めに、病氣を恐れたためもあります。戦争で死ななくとも、この道僕の前途は知れてゐました。けれどあなたの強い思ひ入つた女の命に引き寄せられて、僕は心にすまないと思ひながら――

エレエナ。(悲愴な聲で)もう止して下さい、止して下さい。あなたのおつしやらうとすることは分かつてをります。あたしはあなたのやうに卑怯ではありません。臆病ではありません。病氣を恐れて、死ぬことを恐れて、それで戀が出来るでせうか。――(ヒステリカリイに笑つて)ほほ、いつそ、二人で一所に死ぬのも楽しいではありませんか。――けれどねえ、なせ私達は死ななくつてはならないのでせう。二人がどうしても生きてゐてはならないといふ運命ではないでせう。長くつても、短かくつても、どんなにつらい苦しいことがあつ

ても二人が生きられるだけは生きて居ませうよ。あたし達はまだこんなに若

いんですもの――あなた、おいくつでしたつけ。二十六――。

インサロフ。ええ、二十六です。

エレエナ。あたしが二十歳。――まあ二人ともがびつくりする程若いのですわ。

どうしてこんな若くつてあたし達がそんなに直ぐに死んで行くわけがないではありませんか。――あなた、しつかりして下さい。私達は決して死なないのですよ。

インサロフ。ありがたう、エレエナ。あなたは僕のために暗を照らす光明です。

天使です。

エレエナ。ほんとうに二人の間に嵐が吹いたけれど――もう風いでしましました

これからは静かな寂しい、しかし堅い堅い生活が二人の間に生れるのですわ。――あなたマドンナの御堂の前で、あなたの小さい妻君の爲に祝福を授けて

下をいまして(跪ぶく)

インサロフ。(静かに立ち上りエレエナの頭に手を加へて。)わが妻のために祝福を  
エレエナ。ああ、あなた、あたしは——(インサロフの膝にすがりつく。)

幕

第三幕

スタホフ家の書齋。(第二幕第一場と同じ。)

午後。外は小雨が降つてゐる。

アンナ、ウワル老人、少女ソオヤ、カルタ卓を取り巻いてカルタを取つてゐる。  
シユウビン、トルコ椅子に凭つかかつて「モスタワ・ガゼット」を読んでゐる。  
退屈な、だるいやうな心持がそこらにただよつてゐる。

ウワル。それハアトと——

アンナ。またかい。をぢさん、先刻つから一人で勝つてゐるんだねえ。



ウワル。(ほやけた聲で) ハアトの十——

アンナ。(ソオヤに) ごらん、お前。とても叶やしないよ。

ソオヤ。(笑つてゐる。)

シユウビン。(一人でしきりにうなづき乍ら) ほう、ほう。(と足拍子をとつて新聞を讀んでゐる。)

ウワル。ほら、ハアト——

アンナ。え、また——もういやだ、此の人は。(シユウビンに聲をかける。) バウエル、バ

ウエル。

シユウビン。(夢中で新聞に讀み入り乍ら) 何に、何に。

アンナ。まあ来てごらんよ。をぢさんが一人でうまくやつてゐるから。のべつに

ハアトの九だ十だと——

ウワル。早速にハアトの九ができました。

夜の 前の そ  
アンナ。あれだ。ほんとにしやうがない——

シユウビン。そりやはんとにしやうがないや。——そりやいいけれどをばさん、

大變だ。

アンナ。それどころぢやないよ。

シユウビン。まあおききなさい。いよいよ戦争がはじまりましたせ。

アンナ。さうかい。何處でね。

シユウビン。何處でね——はのんきだね。ロシアとトルコの戦さがはじまつたん

ですよ。

アンナ。まあさうかい。

シユウビン。まあさうかい——ぢやあない。大變ですよ。新聞を讀まないんです

か。讀んできかしてあげませう。

アンナ。ああ。(氣のない返事をする。)

ソオヤ。(調子づいた聲で) ええ。讀んできかして。讀んできかして。

シユウビン。「いいかい。(讀む)ええと……」

トルコ官戦布告 トルコ皇帝はロシア皇帝に對し十月二十七日正午を期限としてブルガリア公國駐屯軍隊の撤退を要求し右期限内に撤兵を終了せざる時は直ちに敵對行動を執るべきことを急告せり。

國境動員 ロシア皇帝は國境守備軍團に對し二十四時間内に動員を行ふべきことを命令せり。

これからが大變です——よござんすか。(讀む)。

ソフィア府大暴動ブルガリア國民黨の崛起 ロシアトルコ戦端開かれんとする形勢刻々に明白となるに従ひ従來トルコ政府の専制の下に空しく涙を吞むで蟄伏し居たるバルカン諸邦の基督教國民は一齊に崛起して一舉トルコ政府を覆し祖國の獨立を回復せんとする氣勢を示せるが、この反トルコ運動の第一弾とも見るべきは十月二十日夜ブルガリア國の首都ソフィア府におこれる

大暴動にして未だ詳報に接せざれど同國國民黨を中心とする一團の暴徒はトルコ知事の官舎に亂入して恐るべき殺戮を行へるもの如し。その他トルコ官憲と、ブルガリア革命黨員の衝突は到るところに慘劇を演じつつあり。

ゾオヤ。まあ大變ね。そのブルガリアつていふのは、インサロフさんのお國なん  
でせう。

シユウビン。「さうさ。」

ゾオヤ。トルコとはちがふんですか。

シユウビン。トルコのうちのブルガリアだよ。

アンナ。ちやあインサロフさんも戦争に出るのかねえ。

シユウビン。出るかもしれない。けれど大丈夫ロシアを攻めには來ませんよ。ブルガリア人はトルコを敗かして謀叛しようと思つてゐるんだから。

ゾオヤ。ちやあ愈々革命がはじまるのね。

シユウビン。生意氣を言つてやがる。革命つて何だか知つてるかい。  
 ソオヤ。知らなくつてさ。トルコの政府を亡ぼしてブルガリアの獨立を回復する  
 ことでせう。吾々の愛する祖先の土地は悪むべきトルコ人のために蹂躪せら  
 れました。吾々の憐れむべき同胞はトルコ人のために牛馬の如く追ひつかは  
 れてゐます……諸君奮へ。——(インサロフの眞似をする。)

ウウル。ほらまたハート——(大きな聲をする。)  
 皆々。(笑ふ。)

アンナ。もうわたしいやだ。をちさんには叶はない。ああくたびれた。(欠伸をし乍  
 らカルタを投げ出す。)あまた頭が痛い。(卓に突伏す。)

ウウル。ほう、ほう。(と咳き乍ら指をまはしてゐる。)

アンナ。また雨が降つてゐるね。

ソオヤ。雪になるかも知れませんが。大變寒いやうですわ。

夜のそ

第 三 幕  
 アンナ。雨がふつたり、雪がふつたり、もう十月も末だね。これから、十二月、

十二月、長い冬がまた来るのだ。——ああ頭が痛い。(頭を押へてゐる。)

シユウビン。(煙草をふかし乍ら。)をばさん、大分物のあはれを感じた顔をしてゐます

ね。——

ウウル。(指をひねつて妙な笑ひ顔をする。)

アンナ。(ぼやけた聲で。)ソオヤ、何かお弾きな。

ソオヤ。ええ。(ピアノの前に坐る。)ウエエベルがよござんすか。「いまはの思ひ」で

も——

アンナ。ああ、ウエエベルかい、いいねえ。(ソオヤ、ピアノを弾く。)

シユウビン。時にをちさんは。大將は。

ソオヤ。(うしろをふりむいて。)昨夜つから。——

シユウビン。歸らない。ふん。——今頃はあいつの家で、あなたわたくしのこ

が(心臓を押へて)かう破れさうな気がいたしますわとか何とか。馬鹿々々しい。それでをばさんの頭が餘計に痛いといふわけか。つ、面白くもない、助平爺が

——(鼻唄)

燃えるばかりが薪ぢやないよ

焦げるばかりが油ぢやないよ

わつて見せたいわしが胸

いつも燃えたり焦がれたり——

(と大きな聲をし乍ら立ち上がつて行きかける。)

スタホフ中尉。(軍服の上に大きな外套を被つてつと入る。何だ。何を言つてゐるのだ。(そのらを眺め廻す。酔氣を帯びてゐる。)

シユウビン。おやおや。これはお早いお歸り。(皆々出迎へる。)

スタホフ。(苦々しげに)何だと。人を馬鹿にするな。(一同を尻目にかけて虎のやうに書齋の

中を歩き廻つてゐる。みんな落着かない様子でぼんやり立つて見てゐる。)

アンナ。お歸り。(と軽く夫の手に接吻して外套をとつて立つ。)

シユウビン。(一人窓際に腰を下して人を馬鹿にしたやうな顔をして煙草をふかしてゐる。)

スタホフ。ふん、またカルタか。(ウワル老人を睨めて)年がひもない。(老人指をまはして

ゐる。)ゾオヤ、何だお嬢様顔をしてピアノなどをいぢくりまはして。あつち

へ行つて臺所の手傳でもしろ。

(ゾオヤ肩を聳かして出て行く。ウワル老人もその跡からのそのそと出て行く。)

アンナ。珈琲を入れて來ませう。(ぬすむやうに夫の外套を持つてこれも出て行く。)

スタホフ。(やはり室内の内を歩き廻り乍ら)シユウビン、相變らずのらくらしてゐるな。

シユウビン。御覽の通り。しかしお頼みの品は——

スタホフ。うん、アウグスチナの胸像が出来たか。

シユウビン。出来かかり。

スタホフ。何だ。そんなことだらうと思つた。

シユウビン。いいえ。ほんとうにでき上がつたんですがね。どうもその鼻から額の工合が——

スタホフ。どうしたといふのだ。

シユウビン。へへ、少しグレイキ・スタイルにいかないのです。せめてあの鼻がもう一寸高かつたらなあ——

スタホフ。馬鹿。あれより一寸高けりや化物だ。

シユウビン。(わざと小聲で。) 昨夜お逢ひでしたか。

スタホフ。誰れに。

シユウビン。アウグスチナさんに。これに。(心臓を押へて見せる。)

夜前の  
スタホフ。(投げたやうに。) 逢ふものか。まだ歸つて来ない。——もう十月も末だ、

第 三 幕  
そのそろ冬にならうといふのに、あいつ一體レウアルへ行つて何をしてゐる

のだ。(ややセンチメンタルになる。)

シユウビン。大方冬の仕度に靴下でも編むでゐるんでせうよ、自分の靴下をね。

さうさうあなたのももあるまいからつてんで。

スタホフ。勝手にませつ返すがいい。だがあんな珍らしい氣高い女はない、あんな正直な慾のない——

シユウビン。でも、いつかのあなたに貰つた手形は引出したでせう。

スタホフ。(紛らすやうに大きな聲で。) いや全くあの女の慾のないことは不思議といつてもいい位だ。あんな女は箕で計る位ある。——あるなら計つて出して貰ひたい。かりにも俺ほどの男を熱くさせる女だ。——だがそれほど思つてやる俺に手紙一本よこさんのはひどい。

シユウビン。どうも大分圖にのつてまくしかけますね。ところで私に一つ頼るの

妙案があるんだが聞いてくれますか。

スタホフ。何だ。

シユウビン。よござんすか。アウグスチナさんの歸つて來た時にですよ——

スタホフ。ふんふん、歸つて來た時に——

シユウビン。あの人に逢つたらばですよ……きつと私の考へ通りにやりますか。

スタホフ。やるとも。やるとも。だからどうする——

シユウビン。いきなり一つ喰らはすんです、鼻面を——そしてどんな顔をあの女がするか見るんです——

スタホフ。黙れ。こいつ、まじめに何か實になることを考へ出してくれたのかと

思や——人を馬鹿にしてゐる。ふんこんな彫刻師風情の何の主義もない人間の言ふことをまともに受けるのが悪いのだ。

シユウビン。へ、主義のない人間ですつて。さうさう、主義に従つて行動する、と

いふのは近頃お馴染になつたクルナトウスキイ書記官のお得意の文句だつて

——さういへば、あの主義の先生、昨日も百ルウブルあなたの所から引き出して行きましたね。あれも何かの主義ですか。

スタホフ。大きにお世話だ。あの人は今一攫千金といふ大仕事にかかつてゐるのだ。貴様などに分かるものか。

シユウビン。とにかく何だか知らないが、百ルウブルといふ金は決して賄賂をとらないといふお役人には、悪くない商法だて。

スタホフ。もう止せ。ほんとうに貴様などにはああいふ人物の眞價は分からないのだ。ああいふ人物なら婿にしても全く恥かしくない。考へても見るがい。愛想はよし、人間は利口で、上流の人と交際はあるし、府廳では幅が利くし——

シユウビン。なあに知事殿お目出度くつて鼻づらをとつて引きまはされてゐるだ

けでさ。

スタホフ。そりやあさうかもしれん。知事もあの人には一目おいてゐるのだ。それだけあの人がいかに實務の才があつて世間に明るいかといふ證據になるではないか。

シユウビン。カルタもお上手だ。

スタホフ。それも結構。何が何でも俺が娘ならああいふ人物を夫にする。ところが家のエレエナの奴と來ては——俺の娘にはちがひないがどうも得體の知れぬ人間だ。全體あいつの魂はどこにあるのだ。今日は滅法はしやぎ切つて跳び歩いてゐるかと思ふと、もう明日は死んだもののやうに沈みきつてゐる。まるで病人だ、見るかげもなくやせつこけた、と思ふとまたもうけろりとした顔をしてゐる。癩にさはるほど氣紛れた——

(下男人相の悪い男、盆に珈琲茶碗にクリイムと砂糖を添へて持つてくる。スタホフ、初めて

椅子に腰を下し珈琲にクリイムと砂糖を入れてかきまはし乍ら言ひつづける)

全體婿といふものは親次第のものだ。親の氣に入りさへすれば、娘が何と思はうが、思慮の定まらない子供の未熟な感情になぞには頓着しない。それで昔は立派に濟むで行つたものだ。それがどうだ。今はまるで世の中が變つて來たな、うつり行く世の是非もなやか。(珈琲を一口のんでまた辯じつづける。) さうだ。今の世の中では、若い女は勝手に自分の氣に向いた男とこちらからずんずん話もする。新らしい本を一人で買つて讀む。供も連れなで勝手に夜夜中何處へでも出て行く。いやはやさうすうしいものさ。これがバリイ風で、それでなければ上流の婦人とはいはれない、新らしい婦人とはいはれない、といふのださうだ。——現につひ二三日前でもさうだ。エレエナが見えない、何處へ行つたと聞いたら、外へお出かけになりましたと言ふのだ。では何處へ行つたと言ふと、誰も知らん。何事だ。そんなことがそもそもあるべきこ

とだらうか。

シユウビン。(始終冷やかな微笑を唇邊に浮かべて煙草を弄り乍らきいてゐたが。) まあ早く珈琲を上がつて返してやつたらいいでせう。召使の前で餘り物を言ふなつて御自分から仰しやるくせに。(と下男の方を噴る。下男陰險な眼をして見返す。)

スタホフ。(珈琲をかきまはしてのむ。下男器物を下げて出て行く。) 全體エレエナが何處でどんな男と交際をしてゐるか。それさへ親の俺には分かつてゐないのだ。俺の知つてるところでは第一にあのむづむづした哲學の書生さんだ。

シユウビン。待つて下さい、ベルセネフは私の親友ですよ。人間は少しむづむづしてはゐるが、立派な男ですよ。

その前の夜

スタホフ。どれほど立派な人物だかしの俺の眼には同じことだ。全體親友だといふ貴様からしてやくざ者の骨頂なのだ。アンナの甥だからといふ廉で眼を瞑つてこの家に住まはせて置くのだ。

第 三 幕

シユウビン。どうも有り難う。

スタホフ。それでもまだあの書生の方は人間の素性が幾らか知れてゐるが、もう一人あの男の友達だといふ、モンテネグロだか、ブルガリアだか、何處の馬の骨だか知れない外國の乞食浪人、ああいふ者を近づけてもしものことのあるつた節には、このスタホフの舊い家名に傷がつくとは思はんのか。

シユウビン。可哀相にインサロフは——あのブルガリアの浪人は、肺病をわづらつて死にかけて居ますよ。

スタホフ。何、肺病。それで死にかけてゐる。氣の毒だが、おかげでこの家へは寄りつけなくなるな。どうもあんな素性の分からん人間を出入りさせては未始終の爲にならん。(歩きまはる) 全體ああいふ人間を無暗に家へ入り込ませたのはお前のをばさんだが——アンナの不しだらだ。家長たる俺に一言の相談もなく、何に依らず俺をないがしろにしてゐるからだ。アンナが俺をないがし



ろにする、エレエナがする、貴様がする。見様見真似で家中の人間が、ゾオヤのやうな召使のちびまでが俺を主人とも思はん。出るにも入るにも碌に送り迎へもしない。室へ入ればアンナが頭痛鉢巻で蒼い顔をして寝てゐる。エレエナは人の顔を見るとついと顔を背向けて何處かへ行つてしまふ。召使を呼んでも滅多に出て來たためしが無い。俺は一家の主人でゐながら、まるで居候か、明巢ねらひのやうなひどいざまだ。これがバリエ風の家庭といふのか。これが現代式の家庭といふのか。(盛に大腿に歩きまはる。)

シユウビン。それだから毎晩でもレウアルの別嬪の顔を見ずにはゐられないと仰しやるんですか。……だが可哀相に、をばさんはあなたをないがしろにするでせうか。それほど元氣があるでせうか。そんなことを言はないで少しはをばさんの身にもなつておあげなさい。もう五六日中にをばさんのお誕生日が來るつていふに、贈り物でも考へてあげた方がましですよ。全くですよ。

第 三 幕  
あなたに爲て貰へば、どんなつまらないことでもをばさんはほくほくしてゐる。

シユウビン。さうさう。いやよく言つてくれた。全くさうだつたよ。俺のところにつまらぬものだが、いつか、ベルンストルフの店で買った寶石入の筐がある、あれをやることにしよう。だが氣に入るか知らん。

シユウビン。そりやあ例のレウアルの別嬪へ贈り物にするつもりで買ったんでせう。

スタホフ。ふん、さうかも知れん。

シユウビン。いやはや、それちやあ定めて氣に入るでせうよ。(と立上る。)

スタホフ。シユウビン、お前今晚例のところへ行くかい。

シユウビン。さやうさね。——いやいけません。明日また仕事をしなくてはなりませんから。夜更かしは禁物です。のらくらしてはゐられませんからね。(つ

と室を出て行く。

スタホフ。つ。(舌打してまた室を歩き廻る。やがて机の抽斗から天雲絨張の小篋をとり出し、絹ハン

カチで表をふいて、中身をしらべて、それからまた臺についた鏡をこすつて、髪を撫でつけて、首を右へ曲げたり、左へ曲げたり、いろいろ氣取つた恰好をして櫛目を入れてゐる。)

(先刻の下男忍ぶやうにうしろに來て軽く咳をする。)

スタホフ。(やはり髪を弄り乍ら)誰だ。(とびつくりし乍らふり向く。)

下男。(狡猾さうな微笑を含んで)旦那様。

スタホフ。何だ。貴様か。何か用か。

下男。旦那様。あなたは私の御主人様で――

スタホフ。分かりきつたことだ。それが何だ。

下男。旦那様。お腹立ちでは困りますが、私も子供の時分からこちらに御厄介になつた御禮と申しては何でございませうが、是非お耳に入れたいことがござ

夜のそ

第

いますので――

三 スタホフ。何だ、何だ。

幕 下男。旦那様は先刻お嬢様が何處へ行らしたか分からんと仰しやいましたが、私はそれをよく存じて――

スタホフ。馬鹿ッ、くどくどと出たらめを、何だ。

下男。いえ、旦那様。お叱りで恐れ入りますが、今日私はたしかにお嬢様がさる家へ御入りになつたお姿をお見かけ申しました。

スタホフ。ど、どこで。誰れの家だ。

下男。ボワルスキイ町の、つひ直近所でございます。そこを借りてゐる人の身の上も門番の爺さんから詳しく聞きました。

スタホフ。(荒く床を蹴つて)黙れ、馬鹿。よくも貴様はくどくどとそんなことを言ひふらすのだ。エレエナさんはお慈悲深いから、貧乏人の家へ見舞ひにいら

しつたのだ。それを貴様知らないで——あつちへ行け、馬鹿ッ。

(下男すこすこ退場しようとする。スタホフ追かけて行つて下男の腕をつかむ。)

スタホフ。待て、貴様。その門番は貴様に何といつた。そこに居る男の名を——

下男。何、何とも申しません。ただあの學、學生の方だとかいふことで——

スタホフ。(下男の腕を掴んでこうきはし乍ら)黙れ、この馬鹿野郎、これいいか、そんな

下らない話を、ただの一言でも外の者にしやべつて見ろ、どうするか。

下男。ど、どういたしまして。

スタホフ。黙、黙れ。やいいいか。貴様、一言でも今の話を他に洩らしたことが分かつたが最後、貴様の身體はどうしやうと俺の勝手にする。きつと外に身體の置どころもないやうにするからさう思へ。やい、わかつたか、それでもういいからあつちへ行け。

(下男こそこそと出て行く。)

スタホフ。(益々亂暴に歩き廻る)ああ、全體どうしたといふのだ。(立止つて)あの馬鹿が

今しやべつたことは何だらう。うん、俺はその家の中に住んでゐるといふ野

郎を見つけたさなくてはならない。さうだ。俺が自分で行つてこよう。かま

はん、どうせ無茶無茶だ。チョツ下男なんぞに何といふぞまだ——。(咳くやう

に言ふ)何といふことだ。何といふことだ。(大きな聲で)チョツ、下男なんぞに

何といふぞまだ。——(瘖聲で呼び立てる)アンナ、アンナ。(と呼び乍ら鏡を抽斗の中へ

しまつてもう一度)下男なんぞに、チョツ、何のぞまだ。——アンナ、アンナ。

(と呼び立てる。)

(アンナ顔に濕布をしてとりみだした蒼い病人じみた様子をして出てくる。スタホフ舌打をし

ながら。)

何だ、また御病人かい。いい加減にするがいい。アンナ、エレエナはどうした。

アンナ。知りません。——どうものぼせて齒が痛んで——(と言ひ乍らいくちなく椅子

に倒れる。

スタホフ。(いらいらし乍ら) 知りません、それで済むか。何處かへ出たのだらう。  
アンナ。さうでせう。今朝早く出たやうです、あの子はまるで私にそんな話はいし  
ないのですからね。

スタホフ。ふん、いい心掛けた。それで母親の義務がすむと思ふか、エレエナの  
奴、今頃はそこらの木賃宿で、何處かの馬の骨とあひびきをしてゐるのを知  
らないのか、下男も知つてゐる。馬丁も知つてゐる。女中も知つてゐる。知  
らないのは親ばかりだ。どこにそんな馬鹿々々しい親があるか。

夜のそ

アンナ。まあ何です。何もそんなにいふことはありません。娘もちよいちよい  
男のお友達の家へ遊びに行くやうですけれど、そんなわるさをするやうな子  
ではありません。何處の馬の骨のなんのと口汚くおつしやるけれど、あれの  
お友達は相應にみんな立派な人物です。娘の外聞になるやうなことをあんな

第

り仰しやるものぢやありませんよ。

三

幕

スタホフ。ふん、お立派な人物だらうよ。でき損ひの美術家に、三文文士、それ  
からモンテネグロだか何處だかしれない渡り者か。みんなスタホフの娘なん  
ぞには勿體なさすぎる位のものさ。

アンナ。それでどうなさらうといふのです。

スタホフ。どうもかうもない。娘の身體だけならどうなつてもかまはん、しかし  
立派な由緒のあるスタホフの舊い家名に對して、娘を乞食同様な三文文士や  
渡り者の革命黨なぞのおもちやにしておくことはできない。これから行つて  
娘の行先を突きとめて娘を引きすつて來るのだ。外套を出せ、外套を。

アンナ。まあ待つて下さい。そんな外聞の悪いまねをしすとも今にエレエナが歸  
つて來たらよく言つてきかせますから。

スタホフ。馬鹿。あいつの口に叶ふものか。澄まし返つた顔をしてそんなことは

存じませんと言ふにきまつてゐる。ああいふづうづうしい女は現場を見とどけて鼻面をぎゆつと押へてやらないうちはいつまでもしらをきるにきまつてゐる。——外套を出せ。外套を。(はげしく呼鈴をならす。先刻の下男が出てくる。)外套をもつて来い。それから馬車の支度をさせろ。(下男承知して出て行く。)何といふぞまだ。(歩き廻る。外套を持つてくる。)

アンナ。およこしこつちへ。(下男の手から無理に外套を引つたくる。)あつちへおいで。(下男肩を聳かして去る。)

スタホフ。どうしようといふのだ。それをよこせ。

アンナ。いけませんいけません。エレエナはあなたばかりの子ではありません。

あの子が人前でそんな恥かしい目に逢ふのを見てはゐられません。行くんなら私が行きます。

夜のそ

スタホフ。馬鹿なことをいふな。(力任せにアンナを突倒して外套を奪ひとりつかけてそのま

第

三

幕

ま客間の扉をあけて外へ出ようとする。アンナ起き上がつて追つかげようとする。その瞬間、客間の扉があいてエレエナ外套の支度のまま眞つ蒼な顔をして入つてくる。

スタホフ。(同時に。)エレエナ。

エレエナ。(興奮を抑へて静かに。)父うさま、ごちらへいらつしやるのです。

スタホフ。(少し出鼻を挫かれてまごついたが立直つてわざとらしく落着いた容儀を作つて。)まあ掛けなさい。(娘の目をぬすむやうに不様に着た外套の襟を直してそこらを歩き廻つてゐる。)

アンナ。(興奮した跡の激動のために氣を失ひかけてまづ蒼な顔をし乍ら搖椅子に倒れかかる。)

エレエナ。(急に帽子と半外套をぬいで母の傍へ寄る。)母あさま、どうなすつて、氣分が悪

いの——

アンナ。(手を揺つて)いいよ。いいよ。(と言ひ乍らポケットから小さなコロオヌ水の瓶を出して鼻にあててゐる。眼はいつかしつとり涙にうるんでゐる。)

スタホフ。(はげしい聲で。)エレエナ、母あさまのことはかまはんでもいい。そこへ

坐れ。(椅子を指す。)

エレエナ。(黙つて椅子に腰を下す。)

スタホフ。(やはり外套の轡を直ししきりに容子を作り乍ら、片手を外套のポケットにつつこんで歩き廻り乍らわざと落着き拂つて言葉を練るやうにして言ひ出す。) エレエナ、お前さんは今まで何處に行つてゐた——ときいてもどうせ言ふまいが——

エレエナ。ええ、わたくしは——

スタホフ。(遮つて) まあいい、まあいい。それは跡でも自然に分かる。それよりもまづ——(また氣取つた演説口調になる。) エレエナ、私は一つお前さんの意見をきかう、いや是非きかなければならない。私や母あさんとお前とは、この頃の流行言葉でいへば、時代のちがつた人間だ、お前は新しい時代、私達は舊い時代の人間だ。思想のちがふのはしかたがない。——まあ世間ではさういふことをいふのだ。しかし乍らいかに時代がちがつても、親は親だ、娘は娘だ、

その前の夜

第

三

幕

そこには人情もある、義理もある、理窟だけでは通らん。親として行ふべき義務もある、また子として奉すべき義務もある。なあさうだらう。

エレエナ。それはさうですわ。

スタホフ。ところでだ、舊い時代とか新しい時代とかいふ詮議は措いて、普通の親として娘たるお前の爲てゐることを看ると、どうも感心することができない、感心のできないどころではない、深く悲しい、情ないことに思ふ。私も、そこにゐる母あさんも、それについてはどれ程か心を傷めてゐると思ふ。(わざとらしい感傷的な低い調子になつて、エレエナの様子を見る。エレエナが俯向いてじつと黙つてゐるので、自分の言葉が相手に感動を與へたと見て、一段聲を昂くする。) 何事も時代の變遷だと世間の人間は言ふ。昔は娘が両親の前へ出ると震へて口のきけなかつた時代もあつた。両親の威厳が極端に畏敬せられた時代もあつた。だが、さういふ時代はすぎた、情ないことだ——とまあ世間の人間は嘆息するのだ。しか

し乍らこのニコライ・スタホフは決して嘆息しない。時代がいかにも變つても親子の道は決して變らん、と私は考へる。いかに新しい時代でも親子の道を忘れるやうな思想は決してゆるすことはできない。さうだ、人間が進化して却つて畜生にならない限り、断じてゆるすことはできないのだ。

エレエナ。ですがお父さま——

スタホフ。(手で抑へて) まあ、黙つてみんな聞きなさい。そこで考へて見ると、私も母あさんも、親としての道は、親として娘に對する義務は立派に果たした。私も母あさんもお前を教育するためには、できるだけの費用をも、勢力をもいとはなかつた。尤もその教育に依つてお前がどれほどの利益を得たか、お前として考へたら、それは別問題だかもしれない。しかし私としてはそれがお前の利益になつたと考へる権利がある。私としても母あさんとしても、あくまでそれをさう信ずる権利がある。して見れば私達はお前に親としての道を十分

に盡したもので、これに對して子としての道を以て報いるといふことは畜生でない限り、人間としてのお前の義務ではないか。親としての道を盡す、子としての道を守る——こればかりはいかほど新しい時代の方でも新しい思想の力でも決して破壊することのできない、いはば神聖な殿堂だ——とかう私は確く信じてゐた。——しかるに實際おこつた事實はどうだ。なるほど若い年頃の娘にはありがちのことだ——多少の向ふ見ずな眞似をするのも場合に寄つては仕方がない、それをさう一圖に野暮らしく責め立てる私でもないが、——しかしエレエナ、お前は誰の娘だといふことを知つてゐるか、ニコライ・スタホフといふ名を何だと思つてゐるのか。これほどまでに、自分を忘れ家を忘れて——

エレエナ。(鋭く遮る) 父さま。わたくしもうあなたの仰しやらうとすることは分かつてをりますよ。

スタホフ。(突然に大聲に。)分かるものか。——何が貴様に分かるか、淫ら阿魔め。アンナ。まああなた後生だから静かにして下さいよ。ほんとうに困つてしまふ。(立ちかける。)

スタホフ。(怒號する。)何が困る。私は言ふだけはきつと言ふ。私がこれから何を言ふか。行くところまで行かなくては止めないのだ。

アンナ。(諦めたやうにまた椅子に身體を埋める。)

スタホフ。(エレエナの方を向いて威丈高に。)さあ、何が貴様に分かつてあるといふのだ。

エレエナ。(靜かに。)わたくしが悪うございました。

スタホフ。それ見ろ。

エレエナ。(同じ調子で靜かに。)わたくし、とうに申し上げなくてはならないのを、

今までおこたつてゐたのは悪うございました。けれど——

その前の夜

スタホフ。(進つて大きな聲で威迫するやうに。)これ。いいか、エレエナ。私は今たつた

第

一言で、貴様を身の置き處もないやうにすることができるとだぞ。

三 エレエナ。え、何でございますつて——

スタホフ。(得意らしく。)さうだ。ただ一言だ。まあ、そんな不思議さうな顔をして

私を見たところで仕方がないさ。(兩手を胸に組みわざと落ち着いた様子を見せ。)ではま

づお前に聞くことがある。お前はボワルスキイ町のさる家を知つてゐるだら

うな。——(急に調子を荒くして一語一語に足拍子をふむ。)びつくりするな。さ、答へ

て見ろ。馬鹿。隠してもだめだぞ。ただの平民の下男づれ、いいか貴様、た

だの卑しい下司下郎のやうな奴に、スタホフ家の娘ともあらう貴様が、そこ

の家へ忍び込むところを見られたのだぞ。貴様がその家に居る……

エレエナ。(熱して。)もう止めて下さい、止めて下さい。ええ、わたくし、何もか

くし立てなぞはいたしません。さうです、わたくしはその家を存じてをりま

す。その家へ度々まゐりました。



スタホフ。ふむ、さうだらう。よろしい。それでは多分その家に住まつてゐる男を知つてゐるだらうな。

エレエナ。(決然と)知つてをります。わたくしの夫です。

スタホフ。(同時に)夫です——その男が。

エレエナ。さうです。わたくしの夫です。デミトリ・ニコノロキ・インサロフは

わたくしの夫です。

スタホフ。(同時に)どうして、どうして。

エレエナ、わたくしはインサロフさんと結婚いたしました。神に誓つてわたし達

は夫婦です。

アンナ。(娘の傍へ寄つて来て。)あのほんとうに、お前。結婚を——

エレエナ。(やさしく)ええ、さうなのです。母さん、勘忍して下さい。私達はもう

一週間前に結婚してしまつたのですよ。

第 三 幕  
アンナ。まあねえ。(椅子に倒れる。)

三 スタホフ。(譯もなく驚いてしばらくぼんやりしてゐたが、我にかへると急に憤怒が火のやうに燃え立つて来る。)何だ、結婚した。あの宿無しのモンテネグロの乞食野郎と結婚した。

ロシアの古い由緒正しい貴族たるニコライ・スタホフの娘が、何處の馬の骨ともしれない一所不住の外國の平民風情と結婚した。しかも兩親のゆるしもうけず、人目を忍んでこそこそと犬の番ふやうな結婚した。何といふことだ。

俺は世界が眼の前に崩れておちてくるやうな氣がする。(髪をかきむしつて地面太を踏む。)世界中の奴等、みんな寄つて来て大きな眼をあいて、この氣の毒な

ニコライ・スタホフが馬鹿にせられたさまを見る。——スタホフの家ももうだめだ。數代つづいたスタホフの立派な家名も斷絶だ。外國の豚の汚い血に汚されてしまつたのだ。ああ、ああ。——(急にエレエナの方を振り向いて。)全體貴様はそんなにして私や此母あさんを欺して馬鹿にして、それで私とそのまゝゆ

るしておくと思つてゐるのか。復讐をしないと思つてゐるのか。私はきつと訴へてやる。法廷にかけて私の恥辱を雪いで見せる——さうだ、貴様は尼寺へ押しこめてしまふ。野郎は監獄に打込んで苦役させてやる。アンナ、もう今日から此奴は義絶した。もうお前の娘でもないぞ。

アンナ。(おどおどし乍ら。) まああなた後生だから少し待つて——

スタホフ。そして全體何時の幾日、何處でどうして結婚をした。教會もなしに、僧正もなしに、人の軒下か、穴倉で、乞食の夫婦のやうに——ああ、人が聞いたら何と言ふだらう。大膽な奴だ。ぶうぶうしい奴だ。それで貴様はよくもこんな大罪を犯しておき乍らのめのめと恥かしくもなく、平氣な顔をして兩親の家に居られたものだ。恥しらず、嘔吐き。貴様は神の罰を思はんのか。エレエナ。(身體を慄はし乍ら、しかし冷静に。) お父うさま。わたくしの身體をどうなさうと、それはあなたの御勝手でございます。けれどわたくしを恥しらずの嘔吐

きのとさう口ぎたなく仰しやることはありません。わたくしあなたにも母あさんにもおかくし申したのは悪うございましたけれど——けれどそれより外にしやうがなかつたのでございますもの。(聲がうるむでくる。) わたくしの身體は尼寺へでも監獄へでも、お父うさまのお氣のすむやうに、何處へどうされてもかまひませんけれど、インサロフさんだけはどうすることもなりません。あの方は大事な方です。あの方の肩には五百萬人のブルガリア人の生命がかかつてゐます。ロシアの法律の力も、いいえ、皇帝の力もあの人のお身體をどうすることもできないのです。——それに——(聲をくもらせて) 今、あの人のお身體は大變弱つてゐます。事に依ると長くはないかもしれませんが。けれどけれどブルガリアの獨立を回復するまでは、殘酷なトルコ人の手からブルガリアの國民を自由にするまでは、あの方は死にません、決して死にません。身體は死んでも魂は生きてゐます。いいえもう今でも生きてゐるのは魂だけかも

しれません。

スタホフ。ふむ、その魂と結婚したといふわけかい。

エレエナ。さうかも知れませんが。まああの人がどんなにやせ衰へてみるかげもな  
い身體になつてゐるか。その氣の毒な様子を一目ごらんすつたら、父うさ  
んあなただつてそんなにひどいことを仰しやることはできないでせう。

スタホフ。うるさい、もう貴様とは親でも子でもない。あかの他人だ。骸骨の手  
をひいて、何處の空を乞食してあるかうとも勝手にするがいい。

エレエナ。ではわたくし、もうお暇がでたのでございますね。わたくしの勝手に  
何處にまゐつてもよろしいのでございますね。實はわたくし、今日は永いお  
暇を頂くつもりで居りましたのです、何もかも打ち明けて申し上げて、それ  
からお暇を願ふつもりでした。

アンナ。お暇乞だつて——何處へ行くの。

エレエナ。夫の故郷へ、ブルガリアへ。

スタホフ。(同時に。) え、ブルガリアへ。

エレエナ。わたくしほんとうは内密で立たうかとも思ひました。その方が却つて  
餘計な御心配をかけなくてすむだらうとも考へました。けれど、どうせ不孝  
を重ねたついでに、何もかも申し上げて、不孝を不孝としてゆるしていただ  
いて、心置きなく立ちたいと思ひ直しました。

アンナ。どうしてブルガリアへ行かなくてはならないのだね。

エレエナ。愈ロシアとトルコとの間に戦争がはじまりましたからです。この千  
載一遇といふ機會にロシアの力を借りて、トルコと戦ひ、ブルガリアの自由  
をとり返さなくてはならないのです。ブルガリアの本國ではもう到るところ  
に革命軍が立ちました。その中にはインサロフさんを首領に仰いで毎日々々  
あの人の歸國を待ちくたびれてゐる人達も澤山あるのです。今がのるかそる

か、大事な時です。一刻おくれるともう再びとり返しをつかない手ちがひになる時です。少しも早くブルガリアへ立たなければなりません。

アンナ。それで何時頃立つつもりなのだえ。

エレエナ。この四五日のうちに。

アンナ。え、四五日のうちに——（ふらふらと氣を失つたやうに眩椅子に倒れる。）

エレエナ。母あさん、どうなすつて。（と駆けよらうとする。）

スタホフ。（先刻から腕をくみ堅く眼をどちて彫像のやうに直立してゐたが、この時いきなり吼えるやうに。）構うな。出て行け。（と叫びざま娘のうしろからその手を引つかんで扉口へ突きやる。

その途端扉が明いて、シユウビン蒼い顔を出す。）

シユウビン。（絞るやうな聲で。）をぢさん。俱樂部からお迎へですよ。

スタホフ。何だ。うるさい。（一聲怒鳴つて、そこに仆れた娘を尻目にかけてたまま、亂暴にそとに

夜の前のそ  
扉の前に立つてゐるシユウビンを突きのめすやうにして客間へ入る。シユウビンもおき上がつて、ば

んやりした顔で室の光景をながめ、エレエナの方へ寄るやうな様子を見せて、また思ひ返してスタホフの跡を追つて出て行く。）

（室の中はだんだん夕ぐれがせまつてくる。けれど外は雪明りで白くどんより光つてゐる。）

エレエナ。（しばらくそこに打ちのめされた人のやうに倒れてゐたがふと氣が附いて立ち上がりあわて

て母の傍へ駆け寄る。）母あさん、母あさん、氣分が悪いの。しつかりして下さい

よ。ね、ね。（母親の身體を抱くやうにして、瓶のコロオヌ水をハンカチにうつして、母親の顔を

ふいたり、胸をさすつたりして介抱する。）

アンナ。（微かな溜息を洩らして眼をみひらく。）あゝ。お父うさんは——

エレエナ。出ていらしたわ。

アンナ。また俱樂部かい。

エレエナ。えゝ、さうでせう。——それよりか、もうよくなつて、母あさん。

141  
アンナ。あゝもういいよ。心配おしでない。——だがお前ほんとうに行くつもり

かい。(うるみ聲になる。)

エレエナ。ええ。しやうがないんですもの。(甘えるやうに母の膝に突伏して母の手を握り乍ら。)ほんとうに母あさん、勘忍して下さいな。あたしどうにも爲やうがなかつたのですもの。あたしが悪いんぢやないわ。あたしただもうあの人(ひと)がどうしても好きで、あの人とはなれては一日も生きてゐられないやうな氣(き)がするんですもの。あたしほんとうに母あさんには濟まないと思ふけれど——

アンナ。でもお前、いつの間(ま)にそんなにあの人(ひと)と仲(なか)よしになつたのだらうねえ。

お前はベルセネフさんの方が好きだつたぢやないか。

エレエナ。ええ。そりやあ、ベルセネフさんは今でも好きですわ。向(むか)ふでもそれはほんとうに親切(しんせつ)にしてくれますわ。けれどやはりインサロフさんとはちがふわねえ。

アンナ。どこがちがふかい。

エレエナ。ベルセネフさんは立派(りっぱ)な正直(しやうぢき)な紳士(しんし)です。インサロフさんが病氣(びやうき)にな

つてからは、あの人(ひと)とあたしとの仲(なか)は十分(じふぶん)知りぬいてゐながら、ただの一度(いちど)

も厭(いや)な顔(かほ)も見(み)せず、心底(しんぞこ)からあの人(ひと)のためにもあたしのためにもつくしてく

れました。けれど、あんまり内氣(うちき)ですわ。犠牲(ぎせい)の徳(とく)——さういつたものはベルセネフさんにもインサロフさんにもある美しい性質(せいしつ)です。けれどベルセネフさんのやつと自分(自分)達の狭(せま)い友達(ともだち)仲間(なかま)だけの美德(びとく)といふだけなのに比べては、インサロフさんの自分(自分)の身(み)も心(こころ)も投げ出して、國家(こくか)を救(すく)ふ、國民(こくみん)を救(すく)ふといふのは何(なん)といふ大きな犠牲(ぎせい)の精神(せいしん)でせう。

アンナ。まあわたしにはそんなことは分(わ)からないが、今時(いまどき)の娘(むすめ)はさういふとりとめのないやうなところに惚(ほ)れるものなのかねえ。

エレエナ。でもインサロフさんは法螺吹(ほらふ)きでもなければ、空想家(くうきや)でもないのですよ。かと言(い)つてあの書記官(しょきくわん)のクルナトウスキイさんのやうな御安直(ごあんぢく)な實務家(じつむか)

ではないけれど、口で言ふだけは必らず實行する人です。ロシアの人達のやうに寄るとさはると議論ばかりして、そのくせ言ふこともすることもあるで無責任なのとはちがひます。あの人の足はしつかりと地面を踏んでゐます。

アンナ。だが選りによつて、外國の、しかもブルガリアの人なんぞに。(と咳くやうに言ふ。)

エレエナ。勸忍して下さい。これも縁ですわ。ああいふ人と縁がつながつて、それが外國人で、父うさんの大ざらひな人で、そして母あさんともかうして別れてしまはなければならぬといふのは、あたし達の命運が薄いのだわねえ。アンナ。(溜息をついて。)後生だからお前、もう別るの何のと言出しておくれでない。わたしもうお前の行先の事を考へると、胸がはりさけるやうな氣がするよ。エレエナ。けれど母あさん、別れてもまた會ふことはありますわ。もしあたし、死んでしまつたとしたらどうして。

アンナ。もう死んでしまつたも同様ぢやあないか。この世ではもう二度とお前の顔を見る望みはないのぢやあないか。これから何千何百里と遠い外國へ行つて、末は野末の露となるか、汚い小舎の中で見も知らぬ異人にとりまかれて死ぬか——それでなくとも、どうせお前に別れてしまへば、このさき、わたしの命も永くはないのだよ。

エレエナ。いやですよ、いやですよ。ねえ、母あさん、そんな心細いことを仰しやらないで下さいよ。達者でゐてまたきつと會ひませうね。それに、ブルガリアといふと、母あさんはまるでシベリアの果てへでも流し者になるやうなことを仰しやるけれど、ブルガリアだつてロシアにまけない立派な大きな町も澤山あるのですよ。

アンナ。そりやあさうだらうさ。けれど今はお前、戦さが初まつてゐる最中だといふぢやないか。鐵砲の丸がいつ飛んでくるかしれやしない。……ああいや

だ。……お前どうしても立つのかい。

エレエナ。ええ、父うさんさへ許して下されば——

アンナ。許すも許さないもないぢやないか。父うさんはもう諦らめておしまひなすつたし、わたしには何もいふ力はなし、——お前さん次第なのだからねえ。

エレエナ。勘忍して下さいな。

See!

○

夜前のそ

アンナ。勘忍するも何もない、母あさんはただ情ないことになつたと思ふばかりですよ。たつた一人の娘の、一生の一度の大事をこんなみじめなことにしてしまふ位なら、一そ死んでくれた方がいと思ふけれど、出来てしまつたことなら今更どうにも爲やうはなし、父うさんだつて口では告訴するの、尼寺へ入れるの、と強いことは言つていらしつても、さうしたからつて元のお前に返るものではなし、ならば娘の恥になるやうなことはしたくない、とは思つていらつしやるのだよ。

第

エレエナ。勘忍して下さい。ほんとにしやうがなかつたんですもの。

三

アンナ。ぢやあほんとうに私達を捨てて行つてしまふのだね。

幕

エレエナ。ええ、でも——

アンナ。さつきは私達に黙つて行つてしまはうかと思つたと言つたね。

エレエナ。ええ、その方が一そいいかと思つたから。

アンナ。この母あさんにさようならとも言はずに、何處へ行くといふ行先のあてもなく、ふいと出て行つてしまふつもりだつたのだね。

エレエナ。母あさん、もう、そんなことを——（泣く。）

アンナ。まあいい。わたしも諦めた。——お前をはじめて産んだとき、わたしはひどく身體を痛めて、それからは二度と子供も出来ないし、一粒種のお前もやはり身體が弱くつて、親のわたしも子のお前もしよつちゆうひくひく病勝ちで、それでもわたしは相變らずいくぢはないが、どうやらかうやらお前は

丈夫に育つて、まづうれしいと思つてゐると、今度のやうななまじ生きてゐて死別れをすることになる。これも何かの約束事で、お前とわたしとはあの時一所に死んで行くのがほんとうの運命だつたのだねえ。(泣き伏してゐるエレエナを靜かに押しつけて立ち上がらうとする。)

エレエナ。(母親にすがりついたまゝ。) 母あさん、立つ前に一度、あのヂミトリに會つてやつて下さいいな。お別れの挨拶だけでもきいてやつて下さいいな。

アンナ。ああ。ねえ。わたしとお前の間を割いてつれて行く、その人に逢つて話をする、そんな氣力がわたしにあるだらうか。——まあ、とにかく少しわたしを休ませておくれ。もう少し氣分がおちついたら、また考へ直すかもしれない。(客間の扉をあけてふらふらと出て行く。)

エレエナ。母あさん——(叫んでそのまゝ、母親のあつた跡の椅子に泣倒れる。)

幕

## 第四幕

モスクワの郊外のインサロフの下宿。

母屋の裏庭。

左手に粗末な二階造の丸木小屋。建物の一部と入口とが見えてゐる。入口は稍々地面より高く低い木の階段が通じてゐる。二階の玻璃窓にはぼんやり燈火の影が射してゐる。

右手前寄りにこぼれかかつた納屋のやうな小舎。扉は外れてゐて中にほんの少しばかり板俵のやうなものが見える。

二つの建物を除いて他は平地。奥はポプラや白樺、樅などのロシアらしい樹林で限られてゐる。右手。一簇の濃い樹林の中に、トロイカが一輛つないである。樹木の陰にかくれて車の全體は見えない。目標の燈火が赤く光つてゐる。(このトロイカは後に樹林の間を縫つて動いて行く工



夫が要る。

樹林のうしろは折れ曲つて傾斜道をなし、だらだらと下へ下りるやうになつてゐる心持。樹林を透して遠景は遙かに一面荒蕪たる平原を現はす。遠景も建物も庭上も樹林も白雪に蔽はれてゐる。

雪は止むであるが風はげしい。

日のくれがた。まだ暮れきらずに雪明りがどんよりそこに漂つてゐる。

第三幕より一週間ほど後のことである。

納屋の前に庭の雪をかきわけて焚火がもてゐる。厚い毛皮にくるまつたウツル老人が納屋の根柢に長々と横になり乍ら焚火にあたつてゐる。シュウビンが外套のかくしに両手をつっこんだままそこら歩きまはつてゐる。

納屋のまはりに旅行用のトランク、毛布など二梱三梱、下宿の亭主と、駈者が母屋とトロイカの間を往復して荷物を運び出してゐる。

駈者も亭主も酔つてゐる様子で、鼻唄まじりにむだを言ひ乍ら働いてゐる。

ウツル。大分おそいな。もう何時だね。

シュウビン。かれこれ六時です。くれないうちにスモオレンスクまでといつてゐ

たが、こいつは夜になりますよ。

ウツル。晝間の愁嘆場が長すぎたよ。

シュウビン。ああ泣きつかれては立ち端がなくなつてしまひます。あれ以來もう一週間も泣きつづけてゐるのだが、今日愈々となつて若夫婦がうち揃つて行つたところでまた悲しくなつたといふわけです。よく涙がつかないものだと思ふ位、可哀さうにをばさん、眼鼻も分らないやうに泣き腫らしてゐる。

ウツル、母親の情さね。生涯の生き別れだ。思ふさま泣くがいい。

シュウビン。だがあの調子では愈立つてしまつた跡が案じられますよ。泣き死に

死んでしまいかも知れない。娘が厄介な結婚をしてくれた。それはもうどうでもいい。ただ何がなしに遠い知らない國へ行つてしまふ。それが諦めても諦めきれないのだから困る。

ウウル。親父どのはまた違ふね。

シユウビン。親父どのは無暗に威張つて見るだけです。何しろあの書記官の先生を婿にする積で一人で思惑をきめてゐたのを、綺麗に蹴飛ばされてしまつたといふものだから癪にさはつてならない。そこでやれ大僧正に訴へるの總理大臣に持ち込むのと、家内中筒拔に怒鳴りちらして、おかげで私なぞも危くぶんなぐられるところだつたが、結局何のことはない、頭痛のする熊角力の人寄せ太鼓と言ふもので、騒いで當りをとるばかり、御當人あれで腹の中は案外何もないんです。きつと今頃は例の俱樂部へ行つて、色女の顔を見て涎をたらし乍らカルタでもとつてゐるでせう。時にお聞き及びでせうが、家の

娘の奴、少し本を読ませすぎましたら、到頭大學生とか何とかいふ若い奴と自由結婚をするのだ、なぞと馬鹿なもので——まあこんな話を茶請けに茶でものんでゐるんでせう。

ウウル。(神祕らしく指をまはして)あれでも父親の身になればさうばかりも行くまいさ。世間もあるしな。

シユウビン。大分老人らしいことを言ひますね。だがまあおやぢさんがいくら怒鳴つても、おふくろさんがどう泣きついて、世間が何と噂を立てようとも、エレエナはそんなことに尻込みする女ではありませんよ。てんでそんなものは眼の中に入れてはゐないのですよ。——(取者と亭主とがせつせと荷物を運ぶ姿をじつと見送り乍ら)まあかうして愈々あの女も行つてしまふんですね。だが何處へ行く——考へるとぞつとしますね。まるで人外境の、砂漠のやうにただびろい野原を夜も晝も走つて行くんです。私の眼の前には、もうあの女が氷點下

三十度といふ寒さに、真夜中過ぎの暗い吹雪の中を、しよんぼり宿場を立つて行くうしろ姿をまざまざと見るやうです。だがあの女が女だてらにこれだけの決心をした、その心持も私にはよく分かるやうな気がします。吹雪は寒い、夜はくらい、それを恐れて家の中にちこまつてゐたところで一體何のおもしろいことがありますか。この大きなロシアの國にあの女を引き止める力が何かありますか。そこには單調な退屈な野原が欠伸をしてゐる。友達はといへば、クルナトウスキイ書記官に、ベルセネフ先生、それからウワルをちさんに、おつちよこちよいのシユウビン君、その位なものぢやありませんか。それに何の心がのこるでせう。

ウワル。のこらないよ。

夜のそ

シユウビン。だがそのやくざな國を捨て、そのやくざな友達を捨てて、遠い異國の空へ迷つて行く、たつた一人の道連れは、夫とたのむ畜生癪にさはるね、

第四幕

だが仕方がない、やつぱり夫とたのむインサロフだが、これが血を略いてゐる。可哀さうだが長くはないや。エレエナがああ、骸骨のやうな病人を引つ張つておふくろの前へ暇乞につれて出た時の、おふくろの顔が見るやうだ。今のあの男の顔といつたら、まるでフィリップの陣中でシイザアの幽霊にとつつかれてゐるブルタスそのままと言ふのだからね。——時にをちさん、ブルタスを御存じですかい。

ウワル。何で知るものかな。多分人間だらうね。

シユウビン。正に然り、人間でした。そりやあ人間でも珍らしい立派な顔だつたが、恐ろしく不健康な顔でした。

ウワル。戦さにやりやあ、おんなじだよ。

シユウビン。戦さにやりやあ、おんなじだ。をちさん、今日は馬鹿にうまいことを言ひますね。だが戦さに出ないで生きてゐようといふにやあ、あの顔では永

くはもたない。エレエナだつて夫婦になつた以上、少しは長く生きてゐて、一所におもしろい目も見たからう。

ウウル。生きたい、生きたい。若い者のすることだよ。若い元氣者のすることだよ。生だ、死だ、戦争だ、平和だ、勝利だ、敗北だ、戀愛だ、自由だ、國家だ——人間にはいろんなことがあるのよ。

シユウビン。さうです、人間にはいろんなことがありますね。エレエナもそのいろんな事を知りたくつて國を飛び出して廣い世界へ出ようとしたのです。だがあんなブルタスの幽霊のやうな外國人に使らなければあの女の新しい生活は開けなかつたでせうか。インサロフはなるほど立派な男だ、少くとも吾のやうにおしやべりではない。吾々のやうに、明けてもくれても、自我の完成だ、生活の革命だ、これは私の大切にはぐくんである思想だ、これは私の靜に生長を楽しんでゐる感情だと、自分の顔を鏡にうつして、自惚れて見

たり悲觀して見たり、自分を相手にぐづぐづ議論ばかりして日をくらすハムレットのできそくなひではない。あの男は冷靜に自分の價値を打算して、迷はずにまつ直に進んで行きます。羨ましいことです。あれだけの人間でも吾々の仲間に出たら、何もエレエナは網の目をぬけ出した魚のやうに大海へ泳ぎ出しては行かなかつたのでせう。——どうです、をぢさん、いつかこの國の吾々の仲間にエレエナを引止めるだけの力をもつた男の出る時がくるでせうか。

ウウル。(欠伸をし乍ら)それはくるよ。きつと。(指をまはす)

シユウビン。もうねむくなつたのですか。ああ、あなたのさうして長々と不しやうらしく寝た姿こそはロシヤの姿です。醒める前の眠か、熟睡の前の眠か。懶惰か努力か、霞のかかつたやうな半醒半眠の姿から何が生まれるだらう。ウウル。神様でなければ分らない。(欠伸をする)

(ベルセネフ、林の中から急いで駆けてくる)

シユウビン。ああ、ベルセネフ、よく来たね。(手を出す。)

ベルセネフ。(息をきり乍ら友達の手をにぎりしめて。) まだだね、まだだね。間に合つてよ  
かつた。

シユウビン。愈々お別れだね。

ベルセネフ。ああね。(間。)

シユウビン。君もハイデルベルヒへは何時立つつもりだ。

ベルセネフ。年のうちに立たうと思つてゐる。

シユウビン。だんだん寂しくなるね。僕も早くロオマへ行かう。——君、インサ

ロフは戦争に出るつもりだらうか。

ベルセネフ。あの身體ではなあ。あの男の肺はもう半分なくなつてゐる。空想だ  
けで生きてゐる。その空想もまだまだ實現には遠いやうだ。

シユウビン。空想ぢやあない。あの男はエレエナの灼くやうな女の熱で生きてゐ

るのだよ。あの男にとつてはエレエナは、くれかかる前の太陽の光のやうな  
ものさ。——ベルセネフ、君も結局は戀愛の失敗者だつたね。僕が君を勝利者  
として羨んだ時もあるが、今はお互ひに敗北者だ。敗北者同士手を握つて  
氣の毒な勝利者のために、できるだけ長い幸福を祈らうではないか。

(手を握る。)

エレエナの聲。(母屋の中から聞こえる。) あなた、大丈夫ですか。しづかに、しづかに。

(インサロフ、全身厚い毛皮の外套に包まれて、顔ばかり蒼白く見えてゐる。眼は鏡く沈んで  
眉から鼻にかけてメスで削つたやうになつてゐる。病衰の様子は著しいが歩調はしつかりして  
言語動作に一味凄愴の氣を帯びてゐる。)

インサロフの跡から抱へるやうにしてエレエナが續く。旅行外套、マッフ、頭巾の中から白い  
顔が彫刻のやうに浮き出してゐる。眼は泣き腫らしてゐるがわざとらしくない快活の表情が言  
語にも動作にも著しい。

下宿の亭主、上さん、娘、跡から手荷物、傘などを持ってついてくる。

一同夫婦を中心として、庭に並ぶ。握手。

エレエナ。お待たせ申しました。(と言ひ乍らそこを見まはしベルセネフを見附けて。)ああ、ベルセネフさん、よく来て下さつてねえ。(なつかしさうに駆けよつて頸にすがり附く。)

あたしもうあなたにはお目にかかれなかつたと思つてゐました。

ベルセネフ。(黙つて女の手に接吻する。)

インサロフ。(ベルセネフの身體を抱くやうにして。)ベルセネフ、君には非常に厄介をかけたさうだねえ。僕は夢中で熱にうかされてゐて殆んど何んにもおぼえてゐなかつた。

エレエナ。ベルセネフさんが看病して下さらなかつたら、あなたは助からなかつたところでしたわ。

夜のそ

ベルセネフ。エレエナ、あなたの強情にも弱りましたよ。私が必要ならばこの人は死にますつて、まるでだだつ兒のやうな——

第四幕

エレエナ。(手を振つて。)勸忍して下さい。勸忍して下さい。——あなたには我儘ばかり言つて、到頭おしまひまで——あたし、ほんとうにあなたには濟まないと思つてをりますわ。

ベルセネフ。(咳くやうに。)何もそんなに——

(間のわるいやうな沈黙。)

シユウビン。(軽く沈黙を破る。)さあ、吾々三人が最後にここでまた落ち合ふことになつたのは、宿縁の空しからざるところとして感謝の情にたへません。何事も宿縁です、運命です。吾々は運命の命するまゝに従ひ、一切の過去を過去として笑つてしまはうと思ひます。吾々はまづインサロフ君とエレエナさんの新しい生活のために幸福を祝します。次にわがベルセネフ君の學者としての新しい生活のために幸福を祝します。最後にわがやくざなシユウビン君の藝術家としての新しい生活のために祝盃を上げたいのだが、生憎シヤム

パンの口がぬいてありません。吾々はここに空のゴツプをあげて、わがインサロフ御夫婦の健康を祝し、ブルガリア國民の希望多き未來の爲めに萬歳を唱へようと思ひます。神よ吾々の親友の新生涯をして幸ひ多からしめ給へ。  
 (唱ふ。) 行く手は遠し、み神とともに——

(一同乾盃の眞似をする。笑聲。)

インサロフ。では皆さん、お別れといたします。ありがたうございます。(十字を切る。) 愛するロシアの國、愛するロシアの友人、みんな無事で下さい。

エレエナ。(シユウビンに。) バウエル、あなたとは随分喧嘩をしましたね。勸忍して

下さい。——(ベルセネフに。) アンドレイ、ペトロキツチ、ほんとうにあなたには

(握手。接吻。抱擁。)

ベルセネフ。落着いたら手紙を下さい。

エレエナ。何處へどうおちつくでせうか。自分で自分の行先が分かりませんけれど

その前の夜

第四 どの——あなた、ハイデルベルヒへいらつしやるのね。きつとお手紙をさし上げますわ。

幕 ベルセネフ。シユウビンもロオマへ行くさうです。

エレエナ。ほんとうに、今度こそは。——バウエル立派な製作をして下さい。——

(ウツルに。) をぢさん、をぢさん。(なつかしきうに抱く。) 母あさんをね、どうぞ、どうぞ。

取者。(大きな聲で。) 仕度が出来ましたよ。早くのつて下さい。

インサロフ。ではさようなら、これで。

エレエナ。さようなら皆さん。

一同。さようなら。氣をつけて行つて下さい。

(接吻。握手。抱擁。)

インサロフの姿まつ森の中にかくれる。エレエナつづかうとする。

幽かにきこえてゐた鈴の音、漸く近く、森の陰に橋の止まつた音。

壁(森の中)からきこえる。待て、待て。おい、待て、待て。

一同(びつくり立止る。エレエナも車にのりかけて躊躇する。)

(ニコライ・スタホフ、外套に一杯雪をつけたまゝ、息をきつてとびこんで来る。)

スタホフ。あ、ありがたい、間に合つた。エレエナ！ 娘！ (と叫びながら車の傍へ

駆け寄る。)

エレエナ。父うさん！ (叫んで雪の中に倒れる。)

スタホフ。(娘の身體を抱きおこし乍ら。) さあ、エレエナ、父うさんからの最後の祝福だ

ぞ。(かくしから天鵞絨にぬひとつた小さな十字架を出し、娘の襟にかける。)

エレエナ。ありがたう。(と聲をうるめ乍ら父の膝にすがつてその手に接吻する。)

スタホフ。(大きな聲で。) シヤムパンを、シヤムパンを。

(馭者樹蔭からシヤムパンの瓶とコップを三つもつて出てくる。)

スタホフ。それ、こつちへ。(シヤムパンの瓶を奪ふやうにとり、コップをエレエナに渡さうとす

る。)

幕 エレエナ。(急に立上がつて。) 父うさん、待つて。(森の中へ入つて行く。直ぐインサロフの手を

とつて連れてくる。)

エレエナ。(インサロフの片手を握つたまゝ、男の片手を父の方に向け、父の片手にもつたコップをとつ

て夫の片手にもたせる。)

スタホフ。(やや躊躇したが急に思返したやうに。) うむ。(方を入れて握手する。)

てくれ。

エレエナ。ああ、ありがたう。——では父うさん。(コップを出す。)

スタホフ。うむ。(と言ひ乍らシヤムパンをつぐ。手がぶるゝ震へて酒の滴が雪の上に落ちる。ス

タホフの眼には感激の涙があふれてゐる。エレエナ、インサロフ、スタホフみな震へ乍らシヤムパンを飲み干す。)

神様の祝福を——

さあ、君達も飲んでくれい。(シユウビン、ベルセネ



フ等にコップを廻す。一同飲む。

(馭者の馬を叱る聲。)

エレエナ。ではお父うさん、ごきげんよう。

インサロフ。ごきげんよう。

スタホフ。うむ、達者でゐてくれよ。

(涙を流し乍ら若夫婦の接吻をうける。)

エレエナ。では皆さん、さようなら。

一同。さようなら。

(エレエナとインサロフとは森の陰にかくれる。馭者の馬を追ふ聲。)

スタホフ。(つと飛び上がるやうに駈けて行く。これ、手紙を出すことを忘れるなよ。(お  
るおる聲で呼び立てる。)

夜のそ

エレエナ。(森の樹間から白い顔だけ出して。) ええ、ではお父うさま、ごきげんよろしう。

幕 四 第

母あさんによろしくね——アンドレイさん、パウエルさん、皆様さようなら。

(鞭をあてる音。トロイカの動き出す音。さようならといふ聲聞かになる。鈴の音しばらくきこえてそれらもだんだん静かになる。)

スタホフ。(喪心したやうにじつと見送つて彫像のやうに立つてゐたが。) エレエナ！ エレエ

ナ！ (頭を押へて倒れかかる。)

(幽かに鈴の音。)

幕

第五幕

イタリア——エネチアの町。

——第四幕より凡そ半年を経過した翌年の春四月のこと——

第一場

大運河の岸。

(この一場は夢幻の如く現實の如く有無懸渺の趣あるべし。)

欠

# 欠

この頃、舞臺は次第に明るくなる。

遠景の海に星の影四つ五つ。船の燈火。

月光淡く、しのび入るやうに射出して、そこらの折り重つた建物の姿を浮かべ出す。——金碧の色褪せて、蒼蒼し、葛がつらのからむに任せた文藝復興期の荒廢した大建築——石門、樓臺、出窓——と近世風の荒れた小家と、すべて近代の西歐風景畫家の筆に傳へられた美しい古都の畫面がそのまま、月の光を浴びて點出せられる。

舞臺は大運河から鹹澤(ラゲウナ)へ出る岸の上。汀には一隻のゴンドラ、黒い鋼鐵の船先に紅燈を掲げた外には、夜そのもののやうな色をした眞黒な板が、水の上に浮かんであるやうな形で横はつてゐる。

ゴンドラの上には、棹を抱へた少年の船頭が腰をかけてゐる。

淡い春月の光が一面に舞臺をてらす。

夜の十時頃。

男の聲。(ゴンドラの中にて。)風が寒くはないかい。

女の聲。(同じく。)いいえ、いい心持ちですよ。——春風ですわ。

(船頭の姿消える。しばらくして薄ぐらい岸の上に、二人の男女の姿が現はれる。インサロフと

エレエナとである。二人とも軽快な旅行服。

インサロフは涙いほど肉が落ちてゐる。

エレエナの眼は大きく輝いてゐる。)

エレエナ。(先に立つて効々しくその捨石の塵を拂ひ乍ら。)あなた、ここで少し休んで行きませう。

インサロフ。ああ。(大儀さうに腰をかける。)

エレエナ。(岸に立つたまゝ海の方を見乍ら快活な娘々した調子で。)静かな晩なこと。波の音が

きこえますわ。——ああ、鷗が飛んでゐる。何といふ寂しいけしきだらう。——

ああ、あすこの右の方に、ぼつと赤くかすんでゐるのがマルクススの廣小路で

すね。あたし達は今まであすこの明るい中で芝居を見てゐたんだわね。

イフサロフ。エレエナ、寒くはないかい。

エレエナ。いゝえ、いゝえ。かうしてゐても身體がぼうとほてつて汗が出るくらいですわ。

インサロフ。羨ましいね。何だか私はぞくぞく變な氣持ちがする。

エレエナ。いけないわ、いけないわ。まだ身體がほんとうではないのですよ。ま

たぶり返すといけない。ちやあ早く歸りませう。——それに芝居が悪かつた

のですわ。ほんとうに厭な芝居を見たんですものね。若い女の死ぬ芝居なん

ぞを——

インサロフ。私はあのキオレッタになつた女が、死に際に叫んだ鋭い叫び聲が耳

についてならない。——あのオペラ歌ひの女は肺病にちがひない。あの女は

自分がもう死にかかつてゐるのだ。

エレエナ。あなた、厭なことを考へるものではないわ。さあ、早く宿屋へ歸りませう。あたしも何だか寒くなつた。

インサロフ。まあ、もう少しあの海を見てみよう。今夜はかうして一晩中起きて海を見てみたいやうな氣がする。

エレエナ。でも何故。

インサロフ。かうやつて海の端へ出てゐると、それだけ國に近づいたやうな氣がするのだ。このまゝ國へ連れて行かれるやうな氣がするのだ。

エレエナ。お國はここからどつちの方角にあたるでせう。

インサロフ。東の方だよ。それあの汽船の通つてゐる――

(汽船の聲がぼうつと遠くにかすんで聞こえる。)

エレエナ。あちからからお國の風が吹いてくるんですね。その風に吹き送られてくる船をあなたは待つてゐるんでせう。あれ、白い帆が見えますわ、あれがお

迎への船ではなくつて。

インサロフ。それだと嬉しいんだが――レンヂッチの船がもう迎へに来るわけなのだけれど。

エレエナ。レンヂッチつて誰れです。

インサロフ。ダルマチアの漁師さ。漁師だけれど吾々の同志に心を寄せていろいろ力になつてくれるのだ。その男が船の支度をして内密で國へ連れて行つてくれる筈になつてゐる。今の私にはその外の道はみんなふさがれてしまつてゐるのだから。

エレエナ。漁師だといふのに感心ですわね。

インサロフ。どうして、ダルマチアの人民は今、ちやうど吾々ブルガリア人がトルコの虐政に泣いてゐるやうにオースタリアの虐政に泣いてゐる。今度の戦争を幸ひにトルコとオースタリアの羈絆から脱して、全斯拉ヴ族の連合した大

自由運動を成就しようといふ考へは吾々に劣らぬ熱度で彼等の間に燃えてゐる。どうだい、ダルマチアの漁師達は網につける鉛の錘を集めて彈丸にして革命軍に送つたといふのだよ。たかが漁師風情の彼等に何の貯へがあらう、ただ魚を捕つて朝夕の命をつないでゐるばかりだ。それが國のためには彼等の唯一の財産をも投げ出して、明日から餓死するのも厭はない。偉いものだ。偉いものだ。——ああ、ほんとうにかうぐづぐづしてはゐられない。おお、レンヂッチレンヂッチ——

エレエナ。あなた、またそんなに興奮してはいけませんよ。またお國のことを思ひ出したのねえ。——いけません、いけません。あなた、今夜一晩はもうすつかりあたしの言ふことをきいて、お國のことも、戦争のことも、革命のことも、何もかもみんな忘れて、二人でおもしろく遊ぶお約束をしたのではありませんか。

インサロフ。さうだつたね。勘忍したまへ。つひ氣になつてゐるものだから。二人でモスクワを立つてから、十一、十二月と、雪の中を道をたづねて迷ひ歩いた揚句が、厭な厭な敵國のキインで病氣になつて、やつとこのイタリアの港まで來は來ても、海の外に道といふ道は塞つてゐる、前途の光明はいはばレンヂッチたつた一人につながつてゐるだけだ。ロシアとトルコの國境には激しい戦がはじまつてゐる。イギリスとフランスはクリミヤに兵を出して、トルコを助けてセバストポオルを圍む計畫を立ててゐる。イタリアも戦争に参加するといふ噂がある。バルカンの諸國は一體何をしてゐるのだ。ロシア一人を見殺しにするつもりか。折角向いて來た千載一遇の好機會を意氣地なく懐手をしてすごすつもりか。そして相變らずトルコ政府の壓制に泣いてゐるつもりか。憶病、怯懦、陋劣——畜生、どうすればいいのだ。

エレエナ。あなた、あなた。厭ですわ。(甘みるやうに手を男の頭にまいて頭の毛を弄つてゐる。)

インサロフ。(態とらしく笑つて)はは。エレエナ、濟まなかつたね。すつかり奥さんの御機嫌を損じてしまつたね。

エレエナ。さあもうそんな話は斷然お止めにするんですよ。その上でもう二人がただかうして一所に生きて、この暖い春の晩の空気を吸つて、二人が何時までもただ一つの體だといふことばかり考へて——ね、いいでせう。それではないと、あたしほんとうにおこりますよ。

インサロフ。まあいいさ。分かつたよ。(靜にエレエナを引寄せて接吻する。エレエナそのまゝ抱かれるやうにして男の傍に坐る。長い接吻。)

夜前のそ  
エレエナ。(男の唇から顔を離して微笑し乍ら)厭ですよ、厭ですよ、あなたは、もう。(髪の毛をかき上げ乍ら)でもねえあたし、やつぱり早く、ブルガリアといふ國へ行つて見たいと思ひますよ。もうこんなねほけ切つたエネチアの町なんか、飽き々々してしまひましたわ。

第五幕  
インサロフ。戦争はこはくはないかね。

エレエナ。だつてあなたと御一所ぢやありませんか。——それにこれまで、宿場でしらべられたり、命掛の思ひで國境を越えたり、氣のつまるやうな旅をして來た跡で、これからの自由な船の旅が、何だかおそろしいやうでも、やつぱり樂しみなんですよ。これからがほんとうの蜜月の旅ですわ。

インサロフ。危つかしい蜜月だね。

エレエナ。いいのよ。いいのよ。こはいことも苦しいことも生きてゐるうちが樂しきだつて、さつき芝居のせりふの中にもあつたでせう。生きてゐるうちよ、生きてゐるうちよ、長くつても短かくつても——ああ、あたし歌が唄ひたくなつた。あたし何だか今夜は一晚さわいでくらしたいやうな氣がするのですよ。ああまた船で子供がうたつてゐますよ。あの歌、何とか言ふんだわねえ。

(歌ふ。)

いのち短し、戀せよ、少女、  
朱き唇褪せぬ間に

あつき血汐の冷えぬ間に

明日の月日のないものを。

ンサロフ。(この間著るしく沈黙の容貌を帯びてくる。)

エレエナ。あなた、あなた、どうなすつて。また沈んでおしまひなすつたわね。

氣分が悪いんですか。ええ。——勸忍して下さい。——でもあたし、あんな

り寂しくなつたんですもの。

インサロフ。さうぢやないのだよ。私は今、お前のいかにもあふれさうな、若い命に、自分から酔つて、歌をうたつてゐるやうな様子を見てたまらない心持ちになつて來たのだ。お前は今、私といふものの命をしつかりとつかまへて、自分の若い命の盃をそれにひつたりひたしてゐる。お前はただこの一つの

戀に生きて、そこからつきない命の泉をくみ出してゐる。けれど私はどうだらう。私はこれまで、祖國だ、自由だ、革命だとあてのない美しい空想に酔はされて、そのくせ自分では五體に何か重りのやうなものをに入れてしつかりと力足をふみしめて大地を歩いてゐるやうに思つてゐた。そこへ來たのがお前だ。まるで、眞つくらな暗夜にあとさき構はずまつしぐらに路を求めて歩いてゐる人間の眼の先につきつけられた光のやうに、お前はむやみに堅くなつてゐる私の傍へ來て優しい言葉を呟いてくれた、柔かな呼吸をかけてくれた。私の戀人だ、私の妻だと言つてくれるたんびに、私の心の毛孔が一つ一つ立つやうな氣がした。それでも私はまだ今までの生活がほんとうの生活だつたか、それともお前を得てからの生活がほんとうなのか、あやふやな——お前の思ひ入つた心持にくらべてはいかにも恥かしいほどあやふやな心持で日をおくつてゐるうちに、はげしい病氣が急に私を墓穴の縁まで連れて行つた。



その熱にうかされて死生の間をさまよつてゐた幾十日の間、私の幻のうち  
に現はれた姿はもう、ブルガリアではなかつた。ほんとうにお前だつた、た  
だお前だつた。それで熱が出てから四十幾日目に、やつと心の目があいて始  
めてお前の笑顔を床の傍に見た時には私は心から救はれたといふ氣がした。  
エレエナ。(迷つて) あなたもう、そんなことは――。

インサロフ。いや、ほんとうだ。インサロフの墮落しかかつた魂はお前に依つ  
て救はれたのだ。お前の灼くやうな女の命が私の心になまつてゐた不純な、  
きたない物を灼きすてくれたのだ。今こそほんとうに私は正直な矛盾のな  
い心で國のために仕事をする事ができるやうな氣がする。若し私のこれか  
ら爲ようとする事が、ブルガリアのために何物かを生んだとしたら、それ  
はとりも直さず、エレエナお前の生んでくれたものなのだ。

夜のそ

エレエナ。あなた。――(インサロフの胸に袖つて嗚咽する。)

幕五第

インサロフ。だが考へて見ると、エレエナ、私の身體はどうしても長くないやう  
な氣がするよ。私の病氣は天罰だといふ氣がするよ。

エレエナ。何をそんなに悲しいことを仰しやるの。天罰だなんて――

インサロフ。いや天罰だ。お前は私には勿體ない。その天罰で私は病氣になつ  
たのだ。そして死が一旦二人の間を引き離さうとした。けれど不思議に生きて  
お前はかうして私の胸にすがつてゐる。どうしてだらう。何でもない、エレ  
エナ、ただお前の力なのだ。

エレエナ。もう嘘ですよ、嘘ですよ。あなたのやうな人を何で神様が殺すもので  
すか。あなたの御病氣はあなたと私と二人の間をねたんで、一寸魔がさした  
だけなんですわ。二人しつかりかうして手を握り合つてさへるれば、二度と  
魔がさす氣づかひはないのですよ。

インサロフ。(沈痛な聲で) エレエナ、勘忍して下さい。

エレエナ。何ですねえ、馬鹿々々しい。——おや、あなた、大變顔色が悪いわ。やつぱり長く風にあたりすぎたからね。もういつまで海を見てゐるのは止めて早く宿屋へ歸りませう。そしてあした早くおきて、レンヂツチの船のくるのを待ちませう。

インサロフ。ああレンヂツチ。

(海の遠鳴劇しくなる。風の音。)

エレエナ。ああ汐があふれて来た。大變大きく汐の音がきこえます。

インサロフ。(立上り乍ら。) 大分風が出て来たやうだ。明日は荒れなければいいが——

(劇しい鷗の羽音。消え入るやうな哀叫。)

エレエナ。鷗が。鷗が。

(二人抱き合ふやうにして並んで立つ。)

また一しきり劇しい風の音。潮の遠鳴。)

幕

*Dark change*

出来得べくんば

暗轉

幕を下す場合にも一旦舞臺を眞闇にして後に幕を下す。

## 第二場

## ホテルの一室

十八世紀好みの古風な様式の装飾。金箔彫り、壁畫破れて荒廢の氣漂ふ。

斜めに室を見せた舞臺。中央より左よりに大きな玻璃扉。色の褪めた暗紅色のカアテンを垂れてある。

扉の左右に高く櫛形の窓一個づつ。その下に、花瓶。一杯に花を盛つてある。及び重苦しい彫刻を施した眞黒な木櫃。

左手前寄りにも小さい扉があつて廊下へ通じてある。中央の柱の上に古風な大時計。

右手斜めに奥まつたアルコナヴやうの別室。暗綠色のカアテンを半分下ろしてある。その中に純白の寢床。寢床の上には小さな高窓があいてある。

玻璃扉の外はバルコンになつてある。

室内適宜の場所に、大小のテーブル。大きな安樂椅子。外に椅子三四脚。

靴、袋等旅行荷物の多くは包みをあけたまま亂雑に散亂してある。

黎明。第一場の翌曉。

(幕の上がつた時にはまだ外は暗い。室は直ちに海に臨んである心持ちで、潮の音間近く聞こえてある。劇しい風の音。室の中には紅い被傘をかけたラムプが、有明にとぼつてある。)

インサロフは寢床の中に、エレエナは安樂椅子の上に勞れて假寐してある。

舞臺静寂。柱時計が高い音を立ててチクタクと時を刻むである。折々噂ぶやうな風の音。

インサロフ。(寢床の中から唸る。) ううむ。ううむ。エレエナ！レンヂャチ！ (エレエ

ナはぐつすり寢こんで醒めずにある。) 誰だ。誰だ。(つとはれおきてよろよろと歩き出す。寢衣

姿のまま、手にはピストルを持つてゐる。) 誰だそこにゐるのは。(覆れ聲に叫び乍らピストル

を握つたまま扉口の方へ歩いて行く。悪夢から醒めた人のやうな強迫観念を現はした表情。扉口に立ちすくんだまま眼と口を大きく開いてぼんやりそこを惘視してゐる。

エレエナ。(扉のバタリと鳴つた音に眼が醒めてそこを見廻し夫の姿を見付ける。) まああなた。どうなすつて——。(駆け寄る。)

インサロフ。(我に返つた様子。靜かに。) ああ、エレエナ、レンヂッチはまだ来ないかい。エレエナ。ええ。あなたどうして。

インサロフ。ぢやあやつぱり夢だつたのだね。(外を見て。) まだ夜が明けない。外はあんなに暗いのも。(ぼんやり立つてゐる。)

エレエナ。あなたそんな風をして風を引きますよ。——さあ、寢臺へ行らつしやい。

夜のそ

インサロフ。何だかもう寝られさうもない。もうレンヂッチが来るかもしれない。私はもうおきる。

幕

五

エレエナ。では温かにしていらつしやい。ね。(外套を着せかけ、介抱し乍ら安樂椅子に坐らせらる。)

朝の風は冷えますからね。

幕

インサロフ。ありがたう。何だかぞくぞくするよ。

エレエナ。ほら御覽なさい。一體どんな夢を御覽なすつたの。

インサロフ。馬鹿々々しい話さ。何でもふいと眼が醒めて見ると、その扉の所が馬鹿に明るくつて、外はかんかん日が照つてゐるのだ。——實は醒めてゐ

やしない、やつぱり夢だつたのだね。——そこにレンヂッチが立つてゐる、お前も一所に立つてゐる、そして手招きをして呼んでゐるのだ。はつと思つて

寄らうとすると、昨日たづねて来た厭な奴、ほら私が探偵だと言つたらう、あのイタリア人に變つてゐるのだ。もう少しでピストルを放すところだつた。

エレエナ。あなたがあんまりレンヂッチのことはかり思ひつづけていらつしやるからですわ。だが昨日来た奴、ほんとうに探偵でせうかねえ。